

ニチメン東京社友会

【目次】

2012年度新年賀詞交歓会のご案内	2
1. 2011年度、総会・懇親会開催報告（於 如水会館）	
① 会長挨拶	会長 河西 良治 3
② 来賓御挨拶	双日㈱代表取締役会長 土橋 昭夫 4
③ 総会・懇親会開催報告	世話人 大山 弘雄 6
―付録；総会出席者リスト―	7
④ 2010年度事業報告及び収支報告並びに2011年度事業計画及び収支予算	8
2. 会員動向及びその他報告事項	
① 新規加入者	10
② 会員名簿訂正（追加分）	10
③ 2011年度（2011年7月～2012年6月）年会費（3千円）入金状況とお願い	10
3. 慶弔関係	
① 平成24年度長寿お祝い対象者	11
② 訃報	12
4. 会員寄稿文	
① 続パクス・ロマーナとパクス・ジャポニカ	竹内 可能 13
② 第二の人生(ii) ―大学の在り方	園山 春一 17
③ 米寿を生きる	石川 勝美 20
④ 総会後の余興の漫談	平岡 昭三 21
⑤ ニチメン笠間会“第245回コンペを迎えて”	石原 靖造 22
⑥ 音楽そぞろ歩き	高木 恒久 24
⑦ イギリス徒然；“金持ちの虚しさ”を知るイギリス人 他	柴田 隆 27
⑧ 第六回ニチメン機友会の盛会に思いを寄せて	山岸 正雄 29
⑨ 書評『老いる覚悟』・『悪名の棺、笹川良一伝』	澁谷 義 32
⑩ 「てふてふ」の韃靼雄飛	浜地 道雄 34
5. OB会、同好会、同期会	
① 俳句の会「いろは句会」	宇治田 薫 35
② 華の1986年入社、同期会	小堀 裕子 36
③ ニチメン湘南会GOURMET会	長谷川 洋 37
6. 弔辞および追悼文	
① 弔辞（故土橋久男さんのご葬儀に際して）	丸山 修作 38
② 土橋久男さんのご逝去を悼む	三分一 克美 39
③ 久澤克己社友を悼む	山邑 陽一 41
7. 社友会役員・世話人一覧表並びに連絡先	43
8. 双日㈱社友会関係連絡先	43
9. 編集後記	44

*** 2012年度新年賀詞交歓会のご案内 ***

恒例の新年賀詞交歓会を下記要領にて開催いたします。
皆様と一堂に会して初春を寿ぎ談笑したいと存じます。
ご参加を心よりお待ちしております。

開 催 日 : 2012年 **1月16日** (月) 12:00～(11:30開場)

会 場 : **双日株式会社 本社 西館 7階 大会議室**

アクセス : *赤坂TBSサカス向い、赤坂新国際ビル西館、
*東京メトロ千代田線「赤坂駅」下車 **5番出口(5b)** 出て、すぐ右側。

会 費 : **無 料**

特記事項 : ① 軽食、飲み物を用意いたします。
② 双日(株)首脳部のご出席も予定されています。
③ OBご長寿表彰
④ 当日、会場にて、双日(株)自社カレンダーを贈呈いたします。
数に限りがありますので、先着順となります。

* 双日(株)社内 社友会担当窓口；双日シェアード・サービス(株) 青木聡弥氏
03-5520-4088

* その他お問合せは、末尾の「役員・世話人一覧表」に記載の世話人にお寄せ下さい。



2011年度社友会総会 会 長 挨拶

会 長 河 西 良 治



本日は梅雨明けの猛暑にも拘わらず斯くも盛大に多くのOBの方々のご参加を賜りまして厚く御礼申し上げます。

又、土橋会長以下役員、社員の方々にはご多忙の折、私共の為に態々お集まり戴きまして本当に有難う御座いました。

又この程我々東西OB会へのご支援金の貴重なる増額を賜りました事を皆様にご報告申し上げ、心より厚く御礼申し上げる次第であります。

さて、数百年に一度と言われる東日本大震災と大津波に遭遇され亡くなられた方々に謹んでお悔やみ申し上げると共に、被災者の皆様には心よりお見舞い申し上げる次第であります。

我々人間がこの地球上に ホモ サピエンス として出現し文明圏を築き始めてから未だに一万年、一方地球は数億年単位と言う桁の全く違う存在である事を考えれば人間としての地球上の経験則としてはまだまだ幼稚の域を脱して居ないと言えるかも知れませんが、そんな事を言っては居られません。何分にもわが国は大地震、大津波大国の立場は未来永劫に変わらないのですから、この大惨事を契機に官民一体となって技術大国としての自然災害と原発に関する研究開発に徹底的に取り組んで頂きたいと思います。

さて私共の会東京社友会も発足して丸5年が経過致しました。

会員の皆様のご協力と双日様の絶大なるご支援のお陰で順調に推移しており、殊に夏の総会とお正月の新年会は、この様に昔のニチメン時代の懐かしい方々が集まり杯を重ねて、和気藹々と良き時代の思い出話に花を咲かせる貴重な機会となって居ります。どうか本日も皆様充分にお楽しみ下さい。

さて、世界の経済情勢は米国の高い失業率、住宅価格の下落、欧州での財政危機問題、中国を初めとする新興国のインフレ懸念等ちぐはぐさはありますが、何と言っても中国を初めとする新興国の進展ぶりは世界の経済情勢を大きく変貌させつつあり、グローバル化の大きな波はとどまる所を知らない事は紛れの無い事実であります。

かかる新しい世界情勢の下、総合商社双日の前途は正に洋々たるものである事は疑う余地の無い所であります。最近レアメタル、石炭開発プロジェクト等、双日の活躍に関する新聞記事が多く意を強く致して居る所であります。

又先月の双日様の株主総会でも、心強い事業内容をベースに株主との質疑応答が加瀬議長の見事な采配で行われ、誠に感激した次第であります。

それでは、ご出席の会員の皆様のご健勝と土橋会長始め皆様の益々のご活躍を祈念申し上げます。有難う御座居りました。

最後になりましたが、今回の大災害に就きましては皆様におかれては既に災害募金に応ぜられて居られるとは存じますが、当会としても募金箱を準備させて頂いて居りますので、お差支えの無い範囲内では是非ご協力願えれば甚だ幸いと存じますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。有難う御座居りました。

来 賓 御 挨 拶

双日㈱代表取締役会長 土 橋 昭 夫



皆様こんにちは。

平年より日早く梅雨が明けましたが、連日大変な猛暑です。

本日は暑い中、160名を超える会員の皆様がお集まりになり、盛大にニチメン東京社友会の総会が開催されました事を先ずはお慶び申し上げます。

平素は当社の経営に対し、一方ならぬご支援を賜り、厚く御礼を申し上げます。

新年会のこの席でお話しを差し上げたと思っておりますが、今年は「辛(かのと)」と言い西暦の末尾に一が付く年であり、この年は非常に突発的な事件・事故が多い年と言われています。

直近では、2001年の米国同時多発テロ、旧くは、1941年の真珠湾攻撃、或いは1971年のニクソン・ショック、というように突発的な事件が多発する年廻りという事を申し上げました。

不幸にもこの3月に東日本の大震災が発生致しまして、今日本は大変な国難に見舞われております。

この大災害に対し、私ども双日としては1億円の義捐金、またグループの役職員からは1,600万円の募金を集め、被災者の方へ寄付させて頂き、更に5年間に亘る5億円の教育基金の創設を致しました。

その他にも、被災地域向け仮設住宅の提供、支援物資の輸送のお手伝い、また社員のボランティア活動をし易くする為のボランティア休暇制度の充実、といった自分たちが出来る限りの事をして、企業の社会的役割の一旦を果たしております。

皆様方の中にも、この災害で近親者やお知り合いが亡くなられた方、或いは被災された方がいらっしゃるかと思います。私どものグループの中にも、この地域で水産加工を行っている関係会社がございしますが、ここで4名の尊い命が失われました。

亡くなられた方々には謹んで追悼を申し上げ、また被災された方々には心よりお見舞いを申し上げます。

さて、去る6月23日に双日の第8回株主総会が開催されました。

例年多数の株主様がお見えになりますが、今年は1,133名の方がご出席されました。所要時間は110分で、11名の株主様より19件のご質問・ご意見を頂戴致しましたが、株価・配当にご意見が集中したと思っております。確かにこの2点は、大変低い水準であり、私ども経営と致しましても、非常に心苦しく思っておりますが、株主様に何とか報いなければいけないと気持ちを強くした次第です。

今後はしっかりと収益を上げて配当原資を確保し、高配当、更には株価の上昇という数字が目に見える形で表す事が出来るよう 努力して行きたいと思っております。

先期の決算は、連結での売上高4兆百億円、経常利益453億円、当期純利益160億円となり、昨年10月にマーケットにコミットした数字を一応はクリアしましたが、上位他社と較べると見劣り感は否めません。

私どもは2004年に大手術を致しまして、集中治療室での治療を懸命に行って参りましたが、この間に他社は優良資産の積み上げを行い、それが今花開き、現在の差に表れており、私どもは相当大きなハンディを背負いながらの勝負となっております。

しかしながら、焦らず目線は高く持つものの、決して規模は追わず、自分の身の丈と実力をしっかり理解して、地に足のついた、双日ならではの、双日らしさを求めて行きたいと考えております。

私ども役員は1年の任期でございますが、先月の株主総会で信任を得ましたので、また新たな決意で経営に精励して参ります。どうぞ引き続き皆様方からのご支援を賜りたく、宜しくお願い申し上げます。

最後になりますが、お集まりの皆様方の益々のご健勝と社友会の一層のご発展を祈念致しまして、私のご挨拶とさせていただきます。

第6回ニチメン東京社友会総会・懇親会開催報告

世話人 大 山 弘 雄

東京社友会の第6回総会・懇親会は7月14日（木）、昨年と同じ「如水会館」で開催されました。3月11日に発生した東日本大震災による未曾有の大災害と福島第一原発の爆発事故による放射能汚染問題が日本全体に暗い影を投げかける中、連日の猛暑もあって、はたして何名の会員諸兄にご出席願えるか心配していましたが、昨年同様多くの皆様にご参集頂いたことに対し心からのお礼を申しあげたいと思います。また今回は、出欠連絡はがきに無回答の方や開催日直前になってのキャンセル（ドタキャン）も想定以下にとどまりました。（ご参加の皆様のお名前は別掲「一覧表」をご参照。）

さて、第一部の定時総会は、定刻に倉又世話人代表の司会で開会、冒頭に昨年度総会以降にお亡くなりになった会員諸氏のご冥福を祈って、出席者全員による黙祷が捧げられました。次いで、河西会長より、社友会発足後まる5年が経過したが、会員皆様と双日からの絶大なるご支援のお陰で本会の運営が順調に推移していることへの謝意表明があり、最後に東日本大震災被災者等への支援募金についての呼びかけが行われました。

引き続き、榊山世話人（事務局・会計担当）から2010年度事業報告・会計報告、橋本監事より監査報告が行われ、そのあと、榊山世話人より2011年度事業計画・予算案の提示と説明がありましたが、これらはいずれも満場の拍手により承認されました。

最後に、ご来賓を代表して双日株式会社の土橋昭夫会長よりご挨拶がありましたが、東日本大震災に対する双日としての支援態勢～社会貢献の具体的内容～と6月23日に開催された同社株主総会の模様等についてご紹介があり、また、今後の同社経営に関する積極的な決意表明をお聞かせ頂き、出席者一同大変心強く感じた次第です。

第二部の懇親会は、今回も浜口世話人の司会で進行しました。最初に、島崎副会長の音頭で乾杯が行われ、会食・懇談へと移行しました。今回は時節柄を考慮し、歌舞音曲の類いは「なし」とさせて頂きましたが、その分ご歓談の時間が増えるというプラス面もあったのではないかと思います。

懇談の輪は広がって大いに盛り上がりましたが、本会に出席は初めてという相原淳雄さん、井田正徳さんなども旧知の会員との邂逅をしっかりと楽しんでいるように見受けられました。

また、この機会に発言したいという方も現れました。司会者に休憩タイムをとる配慮で臨時登板された長谷川世話人の呼び掛けに呼応し長寿会員を代表して登壇されたのが石川勝美さんでした。米寿を過ぎても尚かくしゃくとされており、書道、俳句、海外旅行など趣味の分野を存分にエンジョイされていることを元氣いっぱい披露して頂きました。

一方、事前に、発言の機会をと申し出られていたのが平岡昭三さんでした。定年後のボランティア活動では老人ホームで一人芝居を200回もやってこられたという方だけに、話術も巧みで、スピーチ代わりにやって下さった漫談では会場を大いに沸かせて

もらいました。（今回の漫談の内容は別掲記事をご参照。）

また、司会に復帰した浜口世話人からは東日本大震災の被害者の方々への義援金募集について再度呼びかけが行われ、応援に駆けつけてくれた女性サポーターが募金箱を持って会場を回る場面もありました。募金にご協力頂いた会員の皆様に対し、ここに厚くお礼を申しあげたいと思います。

所定の時間はあっという間に過ぎて、最後に、石澤謙一さんが明るく元気に中締めを音頭を取って下さり、お互いに来年の再会を約して散会となった次第です。

尚、今回も女性サポーターの方々には、受付や募金その他で会の運営に大きなご支援・ご協力を頂きました。非会員でありながらご協力頂いた今井恵子さん、小堀裕子さん、増川恵子さん、また会員の中からは、

垣田佐代子さん、木津奈緒子さん、滑川和子さん達が世話人チームを応援してくれました。ここに改めて感謝の意を表したいと思います。有り難うございました。

[追記] 今回の懇親会設営にあたり留意した点は、双日からのご支援を会員諸兄ご自身に直接感じて頂けるよう当日会費自己負担分を昨年より1千円減額したこと、飲食関連ではアルコール類を控え目に準備し、浮いた予算を料理の質・量の充実に振り向けるよう努めたこと、立ちっぱなしでは疲れるので、歓談用の椅子席やその周辺に料理を置くための小テーブルの数を増やしたこと等ですが、今後の為にも忌憚のないご批判や感想・ご意見などを承りたいと思いますのでよろしくお願い申し上げます。(事務局または世話人の誰かにお伝え頂ければと思います。)

2011年7月14日開催 総会・懇親会出席者

[50音順、敬称略]

ア	相青	淳	雄	ク	倉	又	則	夫	ツ	塚	本	幸	雄	ミ	宮	本	正	博
	青	聡	弥		倉	持	次	雄		津	田	賢	一		村	井	靖	武
イ	浅	正	彦	コ	栗	田	久	彌	ト	豊	木	啓	喜	ム	矢	島	敦	孝
	朝	重	道		小	林	靖	幸		間	根	政	行		山	吹	正	司
ウ	甘	武	廣	サ	三	枝	啓	伸	ナ	中	川	十	郎	ヤ	山	岸	一	雄
	荒	盛	雄		五	女	良	穰		中	谷	宣	英		山	口	良	光
オ	新	勝	晨	シ	坂	井	潤	治	ニ	中	野	正	吉	ヨ	山	田	廣	孝
	幾	博	清		坂	本	俊	司		中	原	和	紀		山	邑	陽	吉
カ	池	謙	格	ス	桜	井	悦	晤	ノ	滑	見	捷	子	ワ	山	本	浩	一
	石	伸	美		々	木	鐵	一		成	部	照	男		与	儀	一	郎
キ	石	正	保	セ	佐	藤	統	郎	ハ	南	村	松	男	フ	吉	川	治	浩
	泉	元	夫		佐	藤	克	三	ヒ	西	野	定	男	ブ	吉	本	浩	健
ク	井	安	従	ソ	三	一	美	雄	フ	庭	本	信	三	ホ	渡	利	晴	陽
	市	隆	久		柴	田	実	次	マ	芳	賀	喜	男	ミ	本	本	陽	陽
ケ	伊	英	雄	タ	島	谷	義	美	ミ	橋	口	春	明	モ	利	本	陽	陽
	今	通	次		島	崎	一	義	メ	橋	爪	俊	郎	ム	本	本	陽	陽
コ	入	克	昭	チ	清	村	雄	一	ヤ	長	本	榮	彦	ム	本	本	陽	陽
	岩	海	明	リ	新	水	人	雄	ハ	花	川	信	洋	ム	本	本	陽	陽
カ	上	隆	利	ノ	菅	藤	次	郎	ヒ	壇	崎	正	雄	ム	本	本	陽	陽
	大	三	生	ニ	杉	沼	郎	治	フ	浜	生	義	恭	ム	本	本	陽	陽
キ	大	悦	三	ハ	杉	浦	好	雄	マ	林	口	昭	弘	ム	本	本	陽	陽
	大	栗	勇	ヒ	杉	浦	幸	久	ミ	平	岡	龍	人	ム	本	本	陽	陽
ケ	大	啓	良	ニ	祐	本	佳	夫	ヤ	平	岡	幹	三	ム	本	本	陽	陽
	大	弘	作	ハ	菅	定	郁	一	ミ	廣	田	昌	介	ム	本	本	陽	陽
コ	大	隆	雄	ニ	須	生	宏	昭	ミ	廣	本	直	太	ム	本	本	陽	陽
	岡	有	茂	ハ	陶	山	忠	晃	ミ	深	尾	匡	郎	ム	本	本	陽	陽
キ	沖	代	彦	ハ	瀬	川	正	裕	ミ	福	富	洋	也	ム	本	本	陽	陽
	小	子	久	ハ	曾	我	宏	司	ミ	福	本	俊	孝	ム	本	本	陽	陽
カ	垣	治	子	ハ	大	原	亨	徳	ミ	古	家	憲	明	ム	本	本	陽	陽
	河	司	治	ハ	高	木	恒	一	ミ	本	田	利	純	ム	本	本	陽	陽
キ	勝	博	司	ハ	高	瀬	善	久	ミ	前	山	甲	章	ム	本	本	陽	陽
	金	勲	博	ハ	高	田	允	男	ミ	牧	尾	敏	務	ム	本	本	陽	陽
ケ	川	已	博	ハ	高	野	秀	宏	ミ	柳	崎	英	進	ム	本	本	陽	陽
	金	三	勲	ハ	高	橋	泰	正	ミ	松	浦	幸	生	ム	本	本	陽	陽
キ	多	緒	三	ハ	高	間	宏	治	ミ	三	嶋	夫	次	ム	本	本	陽	陽
	喜	緒	緒	ハ	高	田	眞	啓	ミ	水	野	夫	一	ム	本	本	陽	陽
ケ	金	三	緒	ハ	高	田	偉	堯	ミ	宮	谷	興	夫	ム	本	本	陽	陽
	城	弘	緒	ハ	高	田	昌	興	ミ				博	ム	本	本	陽	陽

[双日役員・関係者]

土佐 橋 昭 夫
佐鈴 藤 洋 二
茂塚 木 讓 治
平塚 田 良 夫
瀬 井 龍 尚
瀨 下 太 郎

[支援・協力者] (非会員)

小堀 裕 子
増川 恵 子
今 井 恵 子

出席者合計 154名

[註] *印=社友会役員・世話人

**印=支援・協会員



第6回ニチメン東京社友会総会
懇親会風景



2010年度事業報告及び収支報告

(期間：2010年07月01日～2011年06月30日)

ニチメン東京社友会

I. 事業報告

	実績 (千円)	予算 (千円)
第5回総会・懇親会の開催 (2010年年7月24日 158名参加)	761	800
会報・会員名簿の発行 会報9, 10号 名簿 (2010年12月5日現在)	929	930
ホームページの運用	257	300
第4回新年会開催 (2011年1月14日 140名参加)	519	520
慶弔行事。 米寿7名 白寿1名の表彰を致しました	339	350

II. 収支報告

A) 収入の部	当期実績 (千円)	当期予算 (千円)
1 会 費	1,730	1,800
2 双日支援金	1,800	1,800
3 寄 付	48	0
4 そ の 他	13	100
合 計	3,591	3,700
B) 支出の部	当期実績 (千円)	当期予算 (千円)
1 総会・懇親会開催	761	800
2 新年会開催	519	520
3 会報・会員名簿の発行	929	930
4 ホームページの運用	257	300
5 会員慶弔	339	350
6 世話人会の運営経費	268	300
7 事務所の運営費用	648	750
8 予備費+雑費	0	100
合 計	3,721	4,050
C) 差引当期繰越金 (A - B)	当期実績 (千円)	当期予算 (千円)
当期収支残高	-130	-350
前期繰越金	2,091	2,091
当期末繰越金残高	1,961	1,741
次年度以降年会費等	976	
双日次年度助成金	575	
預り金残高	1,551	
合 計	3,512	

2011年度事業計画及び収支予算

(期間：2011年07月01日～2012年06月30日)

ニチメン東京社友会

I. 事業計画

	予算 (千円)	前期実績 (千円)
第6回総会・懇親会 (7月14日)	900	761
会報・会員名簿の発行	750	929
ホームページの運用	300	257
第5回新年会開催	600	519
慶弔行事 (長寿者表彰予定7名)	350	339

II. 収支予算

A) 収入の部	当期予算案 (千円)	前期実績 (千円)
1 会 費	1,800	1,730
2 双日支援金	2,300	1,800
3 寄 付	0	48
4 そ の 他	0	13
合 計	4,100	3,591
B) 支出の部	当期予算 (千円)	前期実績 (千円)
1 総会の開催	900	761
2 新年会の開催	600	519
3 会報・会員名簿の発行	750	929
4 ホームページの運用	300	257
5 会員慶弔	350	339
6 世話人会の運営費用	300	268
7 事務所の運営費用	750	648
8 予備費+雑費	100	0
合 計	4,050	3,721
C) 繰越金及び預り金の部 (A-B)	当期予算 (千円)	前期実績 (千円)
当期収支残高	50	-130
前期繰越金	1,961	2,091
当期末繰越金残高	2,011	1,961
次年度以降年会費等	0	976
双日次年度助成金	0	575
預り金残高	0	1,551
合 計	2,011	3,512

③振込先は、下記いずれかを利用して下さい。(振込手数料は各自ご負担願います。)

A) 郵貯銀行

口座番号：00100－4－318041

口座名義：ニチメン東京社友会

(振込用紙を同封いたしましたので、ご利用ください)

B) 三菱東京U F J 銀行東京営業部

普通口座

口座番号：8225155

口座名義：ニチメン東京社友会代表倉又則夫

(註1) 長寿会員は年会費免除になっておりますが、長寿会員からご送金を頂いた場合は当会へのご寄付とみなし処理させていただきます。(会運営上大変助かります)
但し、何らかの手違い等であれば事務局までご連絡下さい。

(註2) 長寿者氏名(50音順敬称略):

石川勝美、井本公一、大村譲、柿本寅之助、河西郁夫、加藤信一郎、門松孝、上條達雄、川崎清、北村俊夫、国領和彦、近藤貞一、佐藤信世、鈴木明、鈴木邦治、内藤謙二、藤田一郎、望月昌徳、山木重貞、山口富治、山口富美子、山口良孝
以上22名

(註3) 2012年度(2012. 7～2013. 6)年会費納入済会員(50音順敬称略):

浅利真司、荒木武雄、石井幹雄、石井光雄、岩下恒則、浮貝泰匡、大野久生、大森啓作、河西良治、金沢英雄、窪田厚三、黒住厚、桑島有一、佐藤鐵雄、下浦通洋、新藤孝、土橋勇、土屋秀雄、中島和彦、南部晴雄、西川周、西川洋、平井出良彦、平岡昭三、福井芳樹、丸山修作　以上26名（他に会費一括払いの終身会員1名→合計27名）。

[illegible]

平成24年度長寿お祝い対象者

(米寿：1925年生・白寿：1914年生)

白寿：対象者なし

米寿：以下7名

古川 熙

松田好生

西尾敬一

岩 居 宏 一

大野久生

椎 木 与志也

西田 啓一



訃 報

(2011年4月1日～11月10日) *印は非会員

ニチメン東京社友会

氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
岡 本 幸 衛※	業 務	2011年4月22日	77歳
加 藤 陽 一※	食 料	2011年5月23日	74歳
上 杉 将 司	化 工	2011年6月21日	69歳
木 村 正 樹	機 械	2011年7月8日	80歳
久 澤 克 己	機 械	2011年7月18日	80歳
土 橋 久 男	機 械	2011年7月25日	89歳
堀 麟 三	食 料	2011年9月26日	75歳
栃 木 良 雄	化 工	2011年10月4日	79歳
新 藤 喜与次	業 務	2011年10月11日	87歳

ニチメン大阪社友会

氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
酒 井 博 司	織 維	2011年5月27日	73歳
林 雅 夫※	建 設	2011年5月29日	83歳
中 島 護	織 維	2011年6月23日	81歳
三 好 武 彦	織 維	2011年7月23日	84歳
鎌 田 悦 子	化 工	2011年10月9日	81歳
追 記			
酒 井 清※	不 詳	2008年6月28日	78歳
木 戸 兵 三※	織 維	2009年3月8日	79歳
木 全 七 郎※	名 古 屋	2010年8月30日	92歳
垣 見 禮 三※	財 務	2010年12月28日	92歳
林 田 勇※	経理(元役員)	2011年03月13日	92歳

ご冥福を、お祈りいたします。合掌



続パクス・ローマとパクス・ジャポニカ

竹 内 可 能

前号で私は山折哲雄先生の評論「パクス・ジャポニカの奇跡」について触れ、わが国の歴史上奇跡とも考えられる二つの「日本の平和」、つまり平安時代350年と江戸時代250年という二つの「パクス・ジャポニカ」は、国家と宗教が調和の関係を結ぶことができた結果もたらされたものだ、とする先生の論考を紹介した。

そしてまたこのような国家と宗教の調和を可能ならしめた、日本人の精神基盤としての“神仏共存”の思想を、いまこそ世界に向けて発信すべき時である、という氏の主張とあわせて紹介させていただいたものである。

それならばということで私奴、素人歴史探偵とやらは、向こう見ずにも「パクス・ローマ」(ローマの平和)を支えたローマ人の精神基盤とは一体何だったのかについて、私なりの考察を試みたというのが、前号のあらましであった。私はその中でギリシャ・ローマの神話こそローマ人の精神基盤であると考えたのだった。

そこで本号では山折哲雄先生がいわれる「パクス・ジャポニカ」について、それを支えたとされる日本人の精神基盤「神仏共存」のことから考えてみたいと思う。ならばまず前号で論じたギリシャ・ローマの神々を引き合いに出しながら、日本の神々の特質をあげるとすれば一体どんなことになるのだろうか。

まず、これは言わずもがなのことながら、日本の神々がすべからく汎神論的であることは顕著なことである。先に私はギリシャ・ローマの神々を「汎人神的多神教」と述べたが、その伝で申し上げれば、私はこれを「汎神論的仏教」とでも呼ぶべきものと考えた。

この私が考える汎神論的仏教については後ほど触れることにしたいが、いずれにしても日本人が“仏”と別して“神”のことをいうとき、その神なら宿るところはまさに森羅万象である。それこそ山にも川にも、森にも草花にも、岩にも谷にも、もちろん太陽にも月にもである。

森羅万象に神が宿るならば、一見して日本の神もギリシャ・ローマの神々よろしく多神教に思え

る。それによく言われるように天神地祇などといえば、無数の神々の存在がうかがわれるのだが、汎神論的とはいえ日本の神は、多神教というには融通無碍にすぎた似て非なるもののようなのである。つまり

わが国の神は森羅万象に遍在してはいるが、それぞれが必ずしも独立した存在ではないのである。わずかに“天照大神”が太陽神として独立をたもつように見えるが、これとて元とはといえば、奈良時代に皇祖神設立のためにかなりの無理を押して、「古事記」が全国の太陽神を総ざらいのうえ造り出したにすぎない。つまり全国津々浦々の天照神を代表させることにより、これを皇室神としてはじめて固有名詞“天照大神”(アマテラスオオミカミ)としたのは、明治政府が天皇を現人神(アラヒトガミ)に仕立て上げた流儀に似ている。

それはさておき、山折先生が申される「神仏共存」のことだが、対外的なメッセージとして、とりわけそれが一神教の世界に発信されるとき、「神仏習合」とか或いは「融合」といった言葉が、説得力に欠けることを懸念されてのことと思われるが、私には「共存」という言葉もまた、対外的な解説に一層の困難を伴うことが危惧されるところである。

私は日本の神仏の関係を一言で表すには「神仏習合」という言葉がもっとも実体に近い適切なものではないかと思う。「習合」を「馴れ合い」とか「慣れあい」と言ってしまうのはみもふたもないが、事実はむしろその辺に近いきわめて融通無碍なものと思うからである。

「神仏習合」の思想はすでに平安時代に起こったとされるが、その説くところは「本地垂迹説」であろう。曰く「わが国の神は、本地である仏・菩薩が衆生救済のために、姿をかえて迹(あと)を



垂れたとする神仏同体説] (広辞苑) である。ここにいう「神仏同体」とまで言い切ってしまうのは、これまたみもふたもないが、これを「神仏習合」とするならば、私はこれほど見事に実体を言い表す言葉を知らないのである。

私はこのわが国の神仏の関係である「神仏習合」の実体を、ギリシャ・ローマ時代の神々の実体「汎人神的多神教」に照らして、「汎神論的仏教」と呼ぶことにしたのだが、これを表すに「本地垂迹」とは言いえて妙である。

ローマ帝国が畢竟するにキリスト教の国教化などという離れ業を用いて、ギリシャ以来の尊崇すべき神々を遺棄したのに対して、日本という国は“本地垂迹説”などという途方もない詭弁を弄しながら、神々は無条件降伏だけは免れ、その命脈を保つことはできた。

しかし命脈は保ったとはいえ、降伏の代償は小さくはなかった。それは本地垂迹説そのものに歴然としている。まず本地垂迹という言葉自体、戦勝国(仏)が敗戦国(神)に対して用いるのと同然であることだ。いうまでもないことだが、本地なんていう本家の“仏”を表す言葉自体が、占領国の本国じみて傲慢きわまりないし、“迹(あと)を垂れる”なんて表現も慈悲を垂れる式で、“神”と名乗るのはかまわないが、それはあくまでも“仏”が姿を変えてあげた仮のものであることに感謝を強制しているようなものである。因みに“迹”というのは足跡のこと、つまり仏の足跡ということだ。

それより何より本地垂迹の実質的な差別内容である。その最たるものは神が国家宗教としての地位を剥奪されたことだった。鎮護国家の役割から身を引くというわけである。そして新たに仏教に割り当てられたこの重大な責務に対して、わずかにというべきか、神々に求められたものは、その仏教を守護し支援することのみであった。

思えば無体な話であった。日本の神々だって、6世紀中ごろ大陸経由で仏教が伝来される以前には、ギリシャ・ローマの神々よろしく、大らかな「汎人神論的」な立場なら、これを享受していたにちがいない。

それがどうだ、あのインドの賢人仏陀の説く教えが、膨大な典籍・仏典となり、怒涛のごとく海を渡って押し寄せてきた時の、そしてあのように

神々しく崇高な仏像の数々を、はじめて目の当たりにした時の、日本国の驚嘆と讃嘆はどうだ！長く栄華を誇ったギリシャ・ローマの神々は、4世紀末ついにキリスト教に決定的な敗北を喫し、二度と復活することはなかったが、日本の神々はいえ、仏教に屈服するところとはなったものの、ついには本地垂迹説を受け入れるかわり、屈辱的ではあれ仏との並存なら手にはすることはできたのである。

ギリシャ・ローマの神々は教典こそなかったものの、ご立派というほかない見事な神殿は山ほどあったのだが、それに比べてわが国の神々はいえ、山や川そのものがご神体といわれるように、社(やしろ)からして印ばかりのものだった。まして教典と呼べる代物すらなかったことは、渡来した仏の前ではいかにも致命的であったのである。

こうしてわが国の原始的で汎神論的な神々は、仏教が説く高邁な哲理と、まぶしいばかりの芸術的な仏像を“本地”として、おのれは“仏”が垂れ給う迹(あと)、つまりは仏の仮の姿に身をやつすことに甘んじたのだ。

かかる本地垂迹説も、明治維新の暁に突如として火がついたように起こされた神仏分離令、即ちあのおぞましい狂気の廃仏毀釈によって、一旦は仏ばかりか神々までが、壊滅的な打撃を蒙りはしたが、しかし今日にいたるまでこの説の本質は、日本人の心の深奥に安んじているのではないか。

以下は素人歴史探偵子が、これまで古都に遊んで検分したつもりの、そうした薄倖を帯びた神々の代表格と思われる八幡神が、本地の“仏”との間に、役回りをめぐって繰りひろげた苦渋の関係を、閑話休題風に二つお話してご参考に供したい。一つは奈良時代の、もう一つは平安時代の物語である。

[宇佐八幡宮]

はじめに神護景慶雲3年(769年)、和氣清麻呂がこの神宮に遣わされて持ち帰ったとされる、かの有名な神託の物語に触れておきたい。聖武帝を継いだ女帝称徳天皇(孝謙女帝の重祚後)が、怪僧道鏡への止みがたい老いらくの恋のとりことなり、これが昂じて皇継者に彼を、とまで思いつめた血迷いを、土壇場で食い止めたとされるのがこの八幡神の有名なご神託である。

けだし皇嗣問題でこのときパニックに陥った朝廷百官たちの祈願が、時の法王（もちろん仏教徒としての最高位）道鏡の失脚にあったはずだから、ここは仏にすがることの絶望というまでもない。しかし廟堂には仏教全盛の時代とはいいいながら、“仏”が自ら繰り出す“法難”に対してなら“神”で対抗とばかりに、神の役割と出番を演出する権謀術数に長けた者（藤原百川）はいたのである。

“仏”に重大な難局の解決などを期待できない場合にかぎっては、神の特別な出番がありうるものの、これはそのケースといえようか。それにしても称徳女帝のこの時代、年号にしてからが、すべて“神護”なる文字が被せられ（天平神護・神護景雲）、また道鏡排斥に功労のあった和氣清麻呂の氏寺がやはり“神護寺”であったりすることから、怪僧の出現で仏に頼れなかったこの時期、神への期待の高まりは察するにあまりある。

だから“神護”なる言葉には、百官による“神”への悲願と、称徳女帝や道鏡にたいする暗黙の抵抗が秘められていたとするのは、素人歴史探偵の穿ちすぎとは言い切れないのではないか。神々は文字通り“仏”のための守護神と堕してはいたが、同時にまた当節なら野球というピンチや土壇場が出番の救援投手ではあったのだ。

[石清水八幡宮]

なにを隠そう、わが夫婦がこの石清水八幡宮に参詣を果たしたのは今年の冬がはじめてのことだった。友人が私の神仏習合への強い関心を知ってか、それなら旅の寺社めぐりに必ずこれを入れよというアドバイスに従ったのだ。

私は八幡市の男山なる小高い山の頂に座します神宮の境内に足をふみ入れたとたん、伊勢大神宮に次ぐというこんな物々しい官幣大社が、なぜ京洛からも遠隔のこんな辺鄙な地に建立されたのか大変不思議に思った。聞けばこの社も元はといえはあの宇佐八幡宮に勧請したものだそうである。

しかし私の疑問はあっけなく解けた。なんということはない、この地が都の南西にあたる“裏鬼門”だからなのだそうである。なるほど清和天皇の御世、貞観年間の頃、世上不穏の鎮静化をめざして、“裏鬼門”を罪障から護らんとしたものだという。この年間には今年の東日本大震災に匹敵するといわれるほどの巨大な天変地異にみまわれたとされるから、それまで都の鎮護なら比叡山の山

門（仏教）、つまり“表鬼門”に預けっぱなしでできたものが、それだけでは頼りきれずとみえて、“神”の増援による“裏鬼門”の固めを行ったものであろう。

言ってみればこのケースも前例同様にして、“仏”の足らざるところを補う“神”のリリーフ登場ということかと思う。

こんな風にして見てゆくと、なんともはや神のお役目といったら仏の代理か守護者のようにしか見えなくなりそうだが、実は一つだけ見落としてならない重要な、日本の神々独特の機能のことを記しておかねばならない。申し遅れたがそれは“禊”と“祓え”のことである。

御霊信仰は日本古来の独壇場ではないかと思えるほどだが、衆生といわず支配階級をもふくめて、それほどに霊の存在を信じ、とりわけ怨霊の祟りを怖れたから、罪障と思われたものはこれを洗い清め払い除くために、霊を呼び霊に依って禊（みそぎ）や祓え（はらえ）の儀式にかまけたのである。この場合の霊はまさに“神”であり魂と言ってよいと思うが、こればかりは“仏”に取って代わられる領域ではなかったとみえる。

哲学者ニーチェは最近日本の読書界でもけっこうな人気を博しているらしいが、彼には日本の流儀でいえば“怨霊”なる言葉におきかえたいような、“ルサンチマン”（resentiment）—語源はラテン語かギリシャ語だろうか—についての考察がある。

もともとこの言葉の意味するところは、怨恨や嫉妬をふくむ憎悪のことだが、日本人が“怨霊”というときには意味合いがかぎりなく近似してくる。怨恨や嫉妬を帯びた魂のことならばである。

そのニーチェがキリスト教を断罪して、キリスト教は死んだと宣言したとき、彼はその断罪の理由を、この宗教が民衆（人間）のもつルサンチマンを濫用したことに求めた。つまりユダヤ人が宿命的に抱き続けたローマに対する怨恨も憎悪も、キリストはこれらを個々の人間の魂が宿す原罪とみなし、それを救済できるのは神のみとした。ニーチェによれば本来なら彼らのルサンチマンのエネルギーは、諦観や原罪ではなく、真正の敵ローマの為政者に向かうべきだと言いたかったはずである。

ニーチェが日本の仏教や神々にはあまり関心のなかったふしが窺えるのは、これは素人探偵の全くの推理だが、このドイツの哲学者なら、禊や祓えにひそむ日本の怨霊信仰の中に、ガリラヤでキリスト教を生んだとする民衆の反ローマ的ルサンチマンと共通のものを見てとったからではないか。

以上に自称素人歴史探偵が、柄にもなく東西の神々の比較論まがいの領域にまで手を出すことになったのは、もとはといえば山折先生のいわれる耳新しいパクス・ジャポニカ論が、引き金であったことは冒頭にお話したとおりである。しかしこれにまた素人なりのパクス・ローマナ論をつきあわせてみると、自分でも思わぬ私なりの発見があった。

その一つは、まことにありきたりで、ここにあらためて申し上げるのとはばかられるのだが、「パクス・ジャポニカ」も「パクス・ローマナ」も、ともに一時代を謳歌した平和は、汎神論的であるか多神論的であるかの違いはあっても、一神教の世界のものではなかったということである。

その二つ目は、これはすでに述べてきたことながら、山折先生が提示されておられるような、日本人による「神仏共存」の思想を世界に向けて発信することの困難である。

今あらためてその理由を二つあげたい。

第一に、わが国の「神仏共存」は、私がすでに見てきたようにこれを敢えて「神仏習合」と考えたいが、日本人が神々と仏をともに合わせ受容するに当たっての歴史的な条件が、あまりに特殊にすぎることである。

多神教というにはあまりに融通無碍な、超現世利益的で祖先神的である日本古来の原始的な汎神論的神々、それらに対するに、宗教というにはあまりに思想的で哲学的な“みほとけ”たち、これらが習合し融合することが出来たのは—それをしても私は汎神論的仏教と呼びたいのだが—多分に日本人の民族的な遺伝子に負うところ大なるものがあつたにちがいない。私はこれを歴史上の、あまりに日本的というほかない特殊条件に帰すべきではないかと思うのである。

第二にこれはもう極めて単純な論理だ。現今地上の最有力の宗教といえば一方にキリスト教、他方にイスラム教であるが、そのいずれもが唯一絶対神をいただく。そしてイエス・キリストからマホメットの誕生にはじまる地球上の大抵の政治的困

難は、現代に至るまでこれらの神によるか、或いは神と神との争い事だと言っても過言ではないだろう。

つまりは現代においても、私が思うには、地上の困難の最たるものは、天上にそれぞれ唯一・絶対神を主張する神が、依然として二神共に座しますことの“絶対矛盾”なのである。だから、と山折先生はおっしゃっているのだろう。日本人による「神仏共存」の出番なら今こそ、と。そして私は頭をかかえこんでしまうのである。そうかな、と。

これは素人探偵子の率直な僭越とさせてもらうほかないが、絶対矛盾の解決などというおゝそれた問題は、これに対応するのに、水と油をもちだすまでもなく、共存や習合をもってする思想の力不足は、如何ともしがたいように思われてならない。

ニーチェが前述のようにキリスト教は死んだと宣言して世界を驚嘆させたのは、今からおよそ150年前のことだった。そして今又わが国の哲学者、梅原猛は明治維新後の日本が“神殺しの国”になっていることを慨嘆して、滅びゆく国への警鐘と鎮魂を語る。

本当にキリスト教は死に、日本の神々は殺されてしまったのか。もしも神の真の存在理由が、個々人の魂の救済にのみ限られたものであるとするならば、彼我の哲人によって死んだと判定されたのは、もしかしてそのような存在理由を喪失した神のことに限られるのではないかと私は考える。

こうして死んだ(殺された)とされる神の中には、終戦時に自ら人間宣言を表された天皇、つまりはあの維新の時以来の現人神(アラヒトガミ)がいたことも、われわれは永く記憶にとどめおかねばならないであろう。

最後に稿を終えるにあたって、あらためてここに書きとめておきたいことを二つ。東西の神々の物語を考えているうちに再発見した私の所感である。

それは何かと問われれば、一つは所詮というべきか、神といえども個々の人間の魂を救済することはできても、個々の人間の魂と魂の間に発生する不和や対立を、解消したり解決するには無力である、ということに尽きようか。全能とされてきた神の痛ましくさえある泣き所というべきである。

もう一つ最後に、そしてだからこそというべきか、俗に30万ともいわれたあまたギリシャ・ロー

マの神々の中にさえ、「平和」(パクス)を司るとされる有力な神は一神たりとも見当たらなかったことである。

ローマ帝政期の高名な歴史家タキトゥスは、同時に元老院議員として支配階級中でも最上層にあった男だが、その彼にしてからが喝破していたといわれるのは、「パクス・ロマーナ」つまりローマの平和なるものが、実は公然たる殺し合いではないというだけの、血生臭いローマの支配である

こと、そしてその支配の実体なるものは、彼によれば暴虐・収奪・不正・悪徳だったというのである。

もしかして「パクス・ロマーナ」といわれてきたものは、ただに後代の史家の謂いであって、当時のローマ人にとっては「戦争」がなかったというだけで、そこに「平和」があったなどという認識も概念もなかったのではないか。ローマに「戦争」をつかさどるれっきとした神マルスの存在は有名だが、ついに「平和」の神は存在しなかった。

第二の人生(ii)―大学の在り方

園 山 春 一



前回は、新米教授の悪戦苦闘ぶりを語らせていただき、同時に、大学が研究機関たるべきか、

教育機関たるべきか問われ揺れ動いているさま、そして、そこで働く人の多くが大学とは研究機関であるとの前提に立っているため、現在大学が求められている改革が遅れている状況を書きました。今回は、その大学が現状維持でよいのか、大学で学ぶ若者の姿勢がこのままでよいのかなど私なりの考えと危惧を皆様に披露させていただきます。

(1) 企業の成長努力と大学の安住：

企業は国際、国内社会において常に競争にさらされ変貌と改革と成長を求められ、それらを追求しています。それに対し教育は国を支えるための人材を育成するということで、国や政府や社会より手厚く守られ、日本の国鉄や郵政などは経営の“ぬるま湯的体質”の改善のため民営化されましたが、日本の教育はいまだにこの“ぬるま湯”から抜け出していない状況です。日本の企業は、国際競争の中で存続と成長を続ける為に、その時々々の経済、社会環境に合わせた工夫を凝らし、競争を生き抜き、勝つために模索を続けてきました。これに対し、大学も日本独特の大学制度を生み出したのは企業と同じですが、企業と異なるのは国際競争力のない、自己満足の塊のような組織となり、今日に至っていることです。

(2) 日本の大学の特徴：

a、入学は難しく、卒業は易しくは、日本の大学を代表する国立、公立、一部私立大学の典型であり、読者の皆様も経験され同意されるところと思います。即ち、日本の大学では入学後は学ぶより、遊ぶことが中心となっています。この傾向は、21世紀の今日でも変わっていません。それ以上に、大学の乱立と少子化の影響でこの傾向に益々拍車が掛かると思われます。

b、私立の乱立：2011年現在日本には、572校の私立大学があります。少子化の始まった1992年に18歳を迎え大学進学を希望した若者の数は120万人でした(ベビーブーム時代は200万人以上いました)。これが17年後の2009年には、大学進学希望者数は74万人に激減しています。即ち、92年比60%減の進学希望者数ですが、大学数は1992年とまったく変わっていません。そして、もっと厳しい現実、1万人以上の受験生を集める人気校は上記572校のうち60校に絞られ、これらの大学と国立、公立大学に進学希望者の半数以上が入学し、残りを512校の私立大学で学生を取り合っているのです。従って、572校の私立大学の約40%が定員割れの状況にあり、存続に四苦八苦しているところです。

私の勤める北陸大学はまさに、この512校のひとつです。このような現状に鑑み、この大学では対策として、それまであった外国学部(定員200名)と法学部(300名)を合体させ、未来創造学部を約10年前につくり、定員確保を目的に新学部

は旧2学部の実員を大幅に削った定員200名で出しました(この定めた定員に満たないと文科省が私立大学に支給する「私学経常費補助金」がカットされます)。定員に関してこのような大胆且つ苦肉の策を講じたにもかかわらず1年目を除き、定員割れが続き2011年度入学者は、日本人学生が150名弱にまで激減しました(ただし、このことを予測し、早くから中国人留学生を受け入れてきたため実際の定員割れは起こっていませんが、日本人学生に限って言えば定員割れは否めない事実です)。また北陸大学には、薬学部があり、こちらは3年前までは定員を維持していましたが、2009年より薬学部も定員割れとなっています。

c、結果：

このような現状が、どんな現象を生んでいるかといいますと：

- 全入時代を迎えたということです。大学や学部を選ばねば大学進学志願者はどこかの大学に必ず入学できるということです。
- その結果志願者は無競争で入学でき、大学側は学生確保のため学力を無視した募集方針を打ち出しました。そのため学生の質の低下を招く結果となりました。学生数確保のため入試方法が大きく変わり、推薦やAO(面談、面接で入学させる)で入学する学生が大半となったが、学生の質の低下に結びついたとして、大学が批判の対象となっていますが(その点に関し大学にも責任あることは確かです)日本全体の問題として小、中、高校における教育制度やその教育成果もあわせ問う必要があります(OECDの行っている国際学力テストにおける日本の小中高生の学力低下が毎年新聞をにぎわせていることはご承知のとおりです)。
- その上、学生を集めて大学の存続を図るため、奨学金制度や学費一部免除制度を設け、体育系学生の入学を奨励し(施設充実で経費増となる)、このような方策が大学の経営内容の悪化、教育環境や施設の弱体、劣化を招き教育の質の低下に結びついています。
- さらに、少子化傾向に歯止めが掛かる様子はなく、これからもいっそうこの傾向に拍車が掛かると思われ、その対策として日本の大学の一部では、中国人留学生をはじめとする留学生による学生数増強に力を入れています。その結果、留学生数が増えたための功罪が発生しています

(日本人学生が留学生の多い学校を回避するため、かえって日本人学生数の減少となり、留学生向けの授業や講義内容を充実させることはやさしい日本語を用いることでどうしても講義内容の低下となり日本人学生の質の向上に結びつかなくなる欠陥が生じます。フランスや欧米諸国で問題となっている移民の教育問題に似た状況となっています)。

(3) 日本社会は大学に何を求めてきたのか(研究機関なのか、教育機関なのか)、求める人材像は？

このような現状分析を通じてわかることは、もともと疑問視されていた日本の大学の質の低さがより一層懸念されるということです。同時に日本では、少子高齢化の世の中になり、若い人の力がよりいっそう求められる時代に、若い人の学ぶ意欲は衰え、人生を安易に送りたいニートやフリーターの増加といった現象が顕著になっていることです(15—35歳の働き盛りの人の2—300万人が、これに該当するといわれています)。さらには、円高現象もあって企業の海外進出が積極的に実施され、日本の空洞化が再び懸念される中、日本の若者の海外に飛び出す勇気は細る一方で“引きこもり傾向”にあり、フリーター予備軍の増加が感じられ、日本の若者の内向き志向と非国際化が危惧されます。

さて、こうした背景の下21世紀の大学の存在意義、存在理由を考えて見たいと思います。それは、地方大学がどのような教育を目指せばよいのか、他方、日本の政治、経済、社会指導層を育成する一般的に言われる一流大学、主要大学はどのような教育を目指せばよいのか(どんな人材を育成すべきか?)と言う設問に答えることです。

小泉元首相が教育立国を唱えたが、それに応え大学自身が変わらぬ限りこれまで同様大学は出たけれど何を学んだかわからないという、これまでの日本の大学教育の欠陥であり内容の伴わない人材の育成がこれからも続くことになり、教育立国などとはいえないことは確かでしょう。それは大学が数十年前と比較してまったく進化、改革、発展を遂げておらず、単に大学数のみが増え、高等教育機関の卒業生が増えたということではないでしょうか。そこが、日本の大学機関の存在意義が問われている主因と考えます。

しかし、文科省も、小泉元首相も、それ以降の歴代の政府も首相も、これからの社会が求める大学像やそこで育成すべき人物像にまったく触れていないし、ましてや、そうした大学像や人材育成に絡み大学自身がどうあるべきか、どんな教育をし、どんな人材を育成するのかまったく描いていないのが現実であります。従って、いまの大学の存在意義は旧態依然のままといえます。

大学に何を日本の社会全体が求めるか、大学自らが考える時期を迎えています。同時に、日本の社会全体がこのことを考えるときに至っていると思います。例えば、日本社会がグローバル化のこの時代において、世界で活躍する世界レベルの人間を育成するにあたり大学に何を期待するのかが一向に見えていません。他方、現代の若者、学生たちに勉強意欲があるのかという最も深刻且つ基本的な問題があると思います。“水を飲みたくない馬を水辺につれて行く”様な状況では教育効果は上がらないと思います。私はこの例をアフリカの現状に合わせ説明しています。アフリカが今も飢餓、貧困、伝染病などに苦しむのは何故かと考えるといろいろある理由の中で、自らの“やる気”と“自覚”に欠けることにもっとも大きな原因があるのではないかと考えています。アフリカでは先進国から受けた60年以上続いた援助が

まったく生かされず、一日1ドルの生活を脱しきれず、識字率がやっと50%といった事態にあります。日本の若者が、これからの日本のあるべき姿を自覚し、やる気を示さねば日本のアフリカ化が起こることは間違いありませんし、社会全体が日本の将来像を描ききれぬと日本の21世紀は暗澹たるものといわざるを得ないではありませんか？

さて、読者の皆様は、ここに提示された2つの問題：

日本の大学に何を求めるか？あるいは、21世紀の大学のあるべき姿は？

そして、日本の若者にどんな人材となってほしいか？同時に勉強意欲にどうやって火をつけるか？勉強意欲を燃やす動機を与えられるか？などにつきどうお考えですか？

以上、第二の人生で体験した事柄から感じた日本の大学につき長々と述べさせていただきました。

もし、編集部からお許しがいただけるなら次回は大学での14年間の学生との交流を中心に“学生に感動を与えられたか”について書かせていただきたいと思います。

*****会員の著作本 紹介*****

編 集 部

『カダフィーに狙われた男』浮貝泰匡 (Ukigai Yasumasa) 著

== 戎光祥出版 Tel 03 - 5275 - 3361 Fax 03 - 5275 - 3865 ==

奇しくも『会報No. 2』『会報No. 3』に連続掲載した“カダフィーに狙われた男”が内容を拡充、集大成し、一冊の本になりました。

読売新聞(11月27日)広告欄によれば、“1969年9月1日——リビア革命の朝—— 商社の貿易マンとしてトリポリに在留していた著者と盟友アゼディン・ラハデリ社長は。王政派関係者の追及、外国人排斥を宣言するカダフィーに狙われ、決死の脱出行に挑む。”とあります。

—国外にも迫る刺客—アラファト議長との取引、一射殺された盟友—
ついに語られる戦慄のノンフィクション。

☆ かの「日刊ゲンダイ」(12月1日発行)で“いま話題のブックガイド”欄にて、本書を表紙写真(カダフィー)入りで、推奨している。



この紙に花束を包んで洋上慰霊祭
にガダルカナルの英霊に献花す

米 寿 を 生 き る

石 川 勝 美

ニチメン退職後28年をふりかえりますと、充実した毎日を日本一環境のよい武蔵野に住み、人生の最後をエンジョイし、米寿を昨年九月に迎えました。戦前、戦中、戦後、と多くの困難に出遭ひ乍らも人の世に生かしてもらひ、感謝の一語に尽きる次第です。

回顧と現状をお知らせします。

- 一、俳 句 : 俳句連盟の紀村秀子（他界）に師事、約13年間
- 二、短 歌 : 短歌結社「槻の木」会員。NHK 学園短歌の会。一ツ橋聖樹会会員
1996年頃、日経日曜歌壇に十五首掲載された。
- 三、書 道 : 国際的書家下田青峰に師事、武蔵野芸術文化祭で金賞、銀賞に入選
- 四、クルーズ : 世界一周四回を含め、日本一周、アジア、豪州ニュージーランド等、
現在まで十八回。十二回のクルーズを短歌で詠み、写真も入れて「船旅讃歌」と題して309首、266頁を2006年に近代文藝社から刊行。
- 五、ゴルフ : 立川国際カントリーのグランドシニア大会で、1994年に優勝。
現在、高崎サンコー 72カントリーの名誉会員。
- 六、同 窓 会 : 東亜同文書院大学42期会、一ツ橋昭24会、旧制香川県立三豊中学東京支部
- 七、武蔵野ウォーキング協会会員、健康くらぶ会員（昨年、作文コンテストで優秀賞受賞）。

米寿祝を社友会の外、如水会等から賜りましたが、二男から受取った金色の帽子と羽織、扇子のセットが印象的で、事ある毎に着て参加しています。ハイライトは、世界クルーズの仲間七名が吉祥寺の扶容亭に集まり祝賀パーティーをして下さって、その後井の頭公園にある、私が寄贈した思い出ベンチで記念撮影したことです。

妻が15年前にくも膜下出血で急逝してから単身で居ましたが、二月に胃ガンを手術してからは近くの老人ホーム敬老園に入居権を払ひ本宅と行ったり来たりをしています。

昭和24年に一ツ橋を卒業して商社ナンバーワンのニチメンに入社、高度経済成長の時代に新しい分野を開拓、全く世界を股に飛び歩いたことが夢のようで、「我が人生に悔なし」で、本文を擲筆します。

短歌四首：

亡き妻がこの世にあれば金婚式墓石と並び子が写真撮る

胃ガンあり天の助けか治療よく三分の一の胃にて生き行く

沈丁花春來たれりと庭先に浄土の香り吾を勵ます

スニオンの岬に立ちて東向き「今日ある吾」を妻に告げたり



総会後の余興の漫談

平 岡 昭 三

私は昨年末の会報に、「毎年の総会は、型に嵌った定番の挨拶スピーチばかりで、殆どウンザリだ。」と書きましたら、そんなら次回は何か余興をやれと云われ、本年の総会の最後に、ちょっと漫談をやらせて頂きました。以下ご報告致します。

私は何時も思うんですが、大体人が自己紹介する時、その人の名前は、聞き取り難い事が多いのであります。そこで私の場合は、お金拾おか（平岡）、財布拾おか（平岡）、と憶えて頂く事にしております。（笑）之だと絶対確実に憶えて頂けると思うのであります。（笑）この呼び方は昔の同僚の東門申三君がつけてくれました。（笑）東門君はギャグの名人であります。（笑）

さて私の事は若いOBの方は、余りご存知ないと思いますので、少し自己紹介をさせていただきます。現役時代には、外為や社長室や機械部など、色々やらせて貰いました。その間、武勇伝も色々有りましたが、色模様なんかも有りまして、ちょっと差し支えますので、残念ながら本日は割愛させていただきます。（笑）

定年後のこの23年間は、ずうっと大前研一の道州制運動に嵌り込みまして、政治の市民運動を続けて参りました。民主党にも入党致しました。恐らく、ニチメンOBで民主党員は、私一人だと思います。（笑）どなたか一人でも、入党して頂けると嬉しいんですが。（笑）

それから大前研一は、皆さんの定年後の過ごし方について、こう云っております。「サラリーマンの定年後の自由時間は、現役時代の労働時間よりずっと長いのであります。この時間を有効に使うには、趣味などを20位作りなさい。」と云っております。それから又、「現役時代と異なるコミュニティーに入りなさい。」とも言っております。この伝で行きますと、ニチメンOB会などで時間を潰すのは勿体無いと云う事になるのであります。（笑）

それはまあ、さて置きまして、（笑）私はその伝で、この23年間、市民運動の他にも色んな事をやって参りました。前にも少し書きましたが、先日亡くなった松村昭太郎君とは、日本全国小笠原からフランス・オーストラリアなど、アチコチ油

絵やゴルフや観光などで、夫々一ヶ月単位の長旅を、重ねて参りました。

それから又、老人ホーム慰問のボランティアで、一人芝居を200回程やって参りました。三味線を引き乍ら、女装して、歌ったり踊ったりの独演会であります。その姿は珍妙を通り越して、我乍らアホらしい体たらくで有りますが、それが又醍醐味で有りまして、中々止められないのであります。（笑）その他、野菜や果物なども作っております。それから又、片目は見えないので有りますが、知識欲は未だ旺盛で、一日一冊のペースで図書館に通っております。まあ晴耕雨読の生活でも有ります。

まあそんな生活を、色々やっておりました処、小泉総理大臣の時、総理直属の「生活達人委員会」というのが有り、私を推薦する人がおりまして、其処から「生活達人」という名の指名と表彰を受けました。まあ、日本人たる者はこの「生活達人」を見習って、大いにもっと豊かな生活をエンジョイされたい、という事の様で有りました。（笑）

さてそれでは最後に、一人芝居の「名月赤城山」のサワリをちょっとだけ、やらせて頂きましょう。（笑）

「厳鉄！」「へーい！」「定八！」「何です、親分！」「赤城の山も今宵限り！生まれ故郷の国定村や、縄張りを捨て、可愛い子分の手めえ達ちとも、別れ別れになる門出だ！」「そう言やあ親分！何だか淋しい気がしやすぜ！」「俺らあ、あしたあどっちへ行こう！」「心の向くまま、足の向くまま、宛ても果てしもねえ旅に立つのだ！」

ここで忠治は抜刀、池の水で刀を洗い、月光にかざす。

「加賀の国の住人、小松五郎義兼が鍛えし業物！」万年溜めの雪水に刀を清めて、（このあとは蜷川親秀先輩の得意の科白であります。）（笑）

「俺にゃあ生涯、手めえという強い味方が有ったのだ！」（笑）

それでは一曲！

“男心に男が惚れて、意気が溶け合う赤城山！”（笑）

どうもお粗末様でした！ ご静聴、有難うございました！（笑）

ニチメン笠間会

“第245回コンペを迎えて”

石 原 靖 造



南9番ホールより倶楽部ハウスを望む

ニチメン笠間会と言うゴルフ同好の会がある事を御存じでしょうか？

富士カントリー笠間倶楽部 茨城県笠間市北方の雄大な丘陵地161万平米（約50万坪）にゆったり広がる東・南・西27ホール このが笠間会のホームコースです。

このゴルフ場は昭和53年（1978年）ニチメンが造ったものです。（当時名古屋機械部）

各ホールがゆったりセパレートされていますので、隣のホールは殆ど見えません。田んぼや畑も見当たりませんし、送電線等也没有ありません。四季折々の花や小鳥のさえずりを楽しめますし、春は新緑、秋は紅葉が素晴らしく、豊かな大自然の中にいる事を実感出来ます。

JGA公認コースレートは東・南72.9 南・西73.4 西・東72.5ですから、正しくチャンピオンコースです。自慢のグリーンは今夏の天候不順で被害を受けましたが、早晩回復の見通しです。

昭和59年（1984年）女子プロ ダンロップレディースも開催されました。クラブ対抗競技では今年の関東大会で約500倶楽部中4位入賞という輝かしい戦績を収めました。注目すべきは関東アマ50傑の内一時期5名、最近でも常に2～3名は名を連ねる事でコース評価の高さが分かって頂けます。

そのゴルフ場もバブル崩壊の荒波を受け、経営不振に落ちた時期もありましたが、株主会員制が幸いし、同じグループゴルフ場の房総・可児・明

智とスクラムを組み難局を乗り切り、立派に立ち直りを見せました。又今年の大震災以降自粛モードに苦戦しましたが、今では殆どのプレーヤーが帰って来ました。

経営陣の努力があった事は勿論ですが、30年の年輪を経てゴルフ場自体の真価が出てきたからだと思います。

ゴルフ場に少しでもお役に立つべく、久本紘一君は平成12年より競技委員を、又私は13年よりハンディキャップ委員を務めています。

ニチメンはその長い歴史の中で数多く後世に残るものを造って来ましたが、このゴルフ場は傑作の一つであると自負しています。

扨て、ニチメン笠間会は昭和53年8月ゴルフ場開場と同時に、ゴルフを通じ会員相互の親睦を深め、友情・博愛の精神を培い、お互いの幸せに寄与する事を目的・理念として発足し、今年で33年目を迎えます。そのコンペも回を重ねる事245回に達しました。当初は2カ月に1回でしたが、今では年10回とし、門戸を広く開放しましたのでビジターの会員も可也おられます。

関係先ではI.S.T.C. 岩本顧問（旧岩本商事社長）、三和印版 望月社長、東村農園 加藤氏、（株）小林 小林社長には発足以来お付き合い願っています。

この間に悲しい出来事もありました。江花輝君、渋谷亮次氏（島之内印刷）の両シングルプレーヤーを含む4名の仲間を失いました。

我々も残念ですが、ゴルフ好きの御本人達はさぞ無念であった事と察しています。

笠間会の1年は1月の新年会で始まります。全員ロッジに泊まり込み、プレー後の夜は総会・宴会で大いに盛り上がります。前年度のプレーを踏まえ全員が意見をぶつけ合って合意した内容は会則に改訂を加えていきます。

毎回総額33,000円の賞金を争うコンペをこれだけ長く続けられたのは、中心になる世話役の並々ならぬ努力と共に全員で楽しめる様工夫を凝らした会則を作ってきたからだと思います。例えばハンデも60歳以上は2年毎に一つ、70歳以上は毎年

一つ増えるとか、70歳以上は白マーク、以下は緑マークから打つと言った具合です。アンダーハンデだけでなく運勝負のペリア、新ペリア方式も何回か組まれて

います。又、コンペをより面白くするため馬券やオネストジョンと言った趣向もあります。

プレー後はもう勝った、負けたの大騒ぎになります。賞金を争ってる以上当然の成り行きですが、どの様な光景になるか容易に想像して頂けると思います。

有志で海外遠征にも出掛けました。ハワイ島、インドネシア、タイ（2回）、台湾、北海道、宮崎フェニックス（3回）と言った記録が残っています。

もうすぐ傘寿を迎える方が二人居られます。同時に若い二世の参加も増えています。ゴルフ場がある限りそこにニチメン笠間会がある事を目標に全員で頑張っていきたいと思っています。

折角与えて頂いた機会ですので、ゴルフの腕を磨きたい人、交遊の輪を広げたい人、スコア抜きで野山を散歩したい人、何方でももろ手を挙げて歓迎致します。一度ビジターで参加して頂ければ笠間会ハンデを決定し、次回からは正会員として賞金争奪戦に参加して頂けますので、是非入会を御検討下さるようお願い致します。

尚、双日（株）にはニチメンから引き継がれたと思われる5名の会員権がありますが、1名は未登録ですし、余り利用されていない様子ですので、

是非笠間会への入会も含め、積極的に活用して頂くようお願いする次第です。

更に以上の様なお願いだけでは別れ難い気が致します。

ニチメンが造ったゴルフ場です。しかも一級品です。アクセスは通常常磐道か電車ですが、20名集まればバスを仕立てることも可能です。

（例えば東京駅—コース往復2,625円）お友達を誘ってエントリーして頂き、運と実力勝負の新ペリアで“ニチメン社友会杯”を争うと言う企画は如何でしょうか？ 笠間会メンバー一同喜んでお世話させて頂きます。是非御検討頂ければ幸いです。

笠間会メンバー紹介と連絡先：

石原靖造(会長)	携帯	090-2248-3939
久本紘一(常任幹事)		090-4952-1857
若原哲夫(会計幹事)		090-6530-3134
矢島孝(エチケット委員)		
岩本喜八郎	桜井潤一	松川力夫
望月清夫	加藤弘三	吉本邦晴
小林兵太郎	小林久	榊
湯磐夫	高木常吉	永田堅志郎
宮永泰俊	川崎毅	星加恭
上村哲嗣	島田重一	近藤善行
三好教雄	岡本純	蒲沢信男
下舞和美	植村健	田村達也
法師人真一	望月道生	東村真一郎
久本慎二		

以上30名

富士笠間の詳細はURLをご覧ください。

<http://www.kasama-club.com>



【前列左より】 川崎 毅、石原精造、高木常吉、久本紘一、望月清夫、久本慎二、植村 健、加藤弘三
 【後列左より】 矢島 孝、若原哲夫、松川力夫、島田重一、桜井潤一、望月道生、岩本喜八郎、榊湯磐夫、
 星加 恭、小林 久、吉本邦晴



音楽そぞろ歩き



高 木 恒 久

音楽とのお付き合いは戦前、ピアノはコルトー、ヴァイオリンではシゲッティー、歌はジッリ。。S
Pレコードを手回し蓄音機で聴いたのが始まり。

戦後1950年台になって海外からやって来たコルトー、モイセビッチ、ギーゼキング、ハイフェッツ、タリアビーニ達が日比谷公会堂のステージで演奏するのを聴いたのです。生演奏は衝撃的でした。日本人の演奏にも迫力を感じました。懐かしい名前は、井口基成、梶原完のピアノ、歌手では三宅春江、中山悌一たち。

日綿に入社したら、音楽どころではなく、、、

東京外語に入ったらレニングラード・フィルハーモニーが来日し、幸運にも通訳のアルバイトの口を得て日給350円。昼食つきの上に練習、本番が毎日只で聴けたのは幸運でした。

灰色の服を着た怖いソ連人集団かと思いきや、やってきたのは明るく楽しい人たちでした。

指揮者ヤンソンス（父）はチャイコフスキー、ショスタコビッチ、ドヴォルザークを指揮して日本の聴衆をすっかり魅了してしまいました。実にハンサムなラトビア人で行く先々でもてました。彼らの演奏の迫力には日本中が驚きました。金管楽器の凄まじい響き、弦はまるやかだが、フォルテでのこれでもか、という時の音量には度肝を抜かれました。見ると食事が違います。彼らが日



「ロシア音楽の旅」打合わせ（2008年）
左、中井美穂 右、西本智実

本に来てる間はホテルの薄いステーキで我慢してましたが、祖国にあっては大きな肉の塊と、実だくさんのボルシチ、そして山の様に積んだパンを食べる人たちです。

やがて、私は日綿実業に入社。コンサートともお別れでした。毎晚会社を離れるのが深夜でしたから。ある時、工作機械の輸出商談をまとめ、一息つくと世界のピアノの巨匠、ルービンシュタインが来ると言うので、財布をはたいてチケットを買い、何とかして行けますようにと神に祈るわけです。結果はハバロフスクに出張せよと言われ、折角のルービンシュタインもオジャンです。リヒテルというソ連のピアノの神様が来ると言うので、またもや切符を買って祈りましたが、これもキエフに出張せよとの命令で駄目になりました。切符を買うと、必ず行けなくなるというジンクスに取り憑かれていたのです。その代わり、溶接機械の輸入初契約が出来ました。

舞台で気絶したフランスの女流ピアニスト。

フランス・クリダという「リストの難曲」を目が覚めるような技巧で弾くフランスの女流ピアニストが、日本に来ました。彼女が「超絶技巧練習曲」を弾いているとき、右手を伸ばして最低音のキーを叩いたとたん、ドレスの裾に足を取られ、椅子の向こう側へ真っ逆さまにドスンと落ちました。彼女は気を失ってステージに倒れたままです。場内は騒然。客席から医者らしい人が舞台上がって脈を取り、瞳孔を調べて急ぎ足で舞台の袖に。もう一人女医さんも駆け上がりました。救急車が来て、担架で彼女は舞台から運び出されました。主催者側の人が出てきて聴衆に詫びています。それから大分時間がたったように思いますが、病院に向かっているはずのクリダさんが、舞台に出てきて皆が制するのを聞かずにリストを弾き続けました。皆の心配をよそに、輝く音で全曲を弾いてコンサートは終わりました。 なにか魔法の力が彼女に働いて弾き終える事が出来たように思えました。私たちは、救急車が彼女を乗せて会場を走り去るのを見送ったのでした。

ダヴィード・オイストラッフのこと。

私は1969年1月3日、日本のさる高名な評論家から頼まれたオイストラッフ氏あての書簡を持ってモスクワ音楽院の事務局を訪ね、オイストラッフ氏に渡して欲しいと頼むと、事務局員は親切に「教授は今教鞭をとっておられるが、もう直ぐ休憩だから教室に行き終わるのを待ちなさい」と言って呉れました。云われたとおりに、教室に行くとオ教授が居られたので私は直接書簡を手渡しました。これで用事は済んだわけですが、折角の事ゆえ授業の続きを見せていただきました。更に、ちょっと初対面から如何かとは思いましたが、駄目もとでお願いしてみたのです。「先生、明後日のチャイコフスキー・ホールでのコンサートを聴かせて下さい」。すると、オ教授はニッコリ笑顔でOKしてくれました。

それはショスタコビッチがオイストラッフの為に書けしめたバイオリン協奏曲の初演で、チケットは一般には売らなかったものです。なのに私は幸運にも、コンドラシン指揮で、オイストラッフがソロを弾く初演を聴くことができました。それは衝撃的ともいえる協奏曲でした。それから一ヶ月が過ぎ、私はゲルツェン通りに駐車しておいた車を動かそうとすると、後ろに駐車しているヴォルガ（大型乗用車）のエンジンを暖めている運転手がヘッドランプをチカッと点滅して合図をしました。何か助けを求めているようなので、私は車を降りて「何かお困りで？」と訊くと、窓ガラスをあけた運転手が防寒帽を脱ぎました。帽子を脱いだら、なんとその男はオイストラッフ氏でした。「エンジンを暖めているんですよ。元気にしてますか？」と問われので、嬉しさ一杯の私は、元気にしてます。また聴かせて頂くのを楽しみにしてますと答えるのが精一杯でした。

当時の世界的な指揮者トスカニーニが「オイストラッフの出現で、世界中のバイオリニスト達は太陽の周りの星屑のごとく光を失った」と、鉄のカーテンの向こうから姿を現したオイストラッフを太陽に准えたのです。その後、私は何回もオイストラッフ先生を聴き、都度深い感銘を受けましたが、先生は1974年に演奏旅行中オランダで心臓発作のため亡くなりました。

ロストロポービッチのこと。

1957年来日した時、私は学生アルバイトで彼の通訳をしたことがあります。その時から数えて20

年後、彼はヴィシュネフスカヤ夫人と子供達を連れソ連を脱出し、自由の国アメリカに亡命しました。そして異国で演奏活動を続けていると、1990年ソ連は崩壊してしまいました。亡命者の母国入りも自由になった1993年、彼は丹下健三さん夫妻を案内してモスクワにやってきました。丹下さんをお世話して欲しいと本社の藤井さんから連絡があり、お陰で私はロストロポービッチと再会することが出来ました。昼食をとりながらの雑談時に、ロ氏は私のことについて「昔、この人はね、私を捨ててカサドを聴きに行ったんですよ」と言って一緒にいた人たちを笑わせました。

然し、彼の記憶のよさには驚かされます。確かに57年来日したときのある晩、既に規定のアルバイト時間は終わってましたから、スペインのチェリスト、カサドが弾くアルペジオーネを聴きに行ったのでした。ロ氏はそうとは知らず、翌朝顔を合わせるや、昨晚僕の弾いたドヴォルジャークは如何だった？ 私は、「ああ神様」といって絶句してしまいました。

再会したロ氏は次のような話を聞かせてくれました。それは、フランス旅行中ディジョンの町の大聖堂に案内され、高い天井を見上げていると、それまで自分が弾く気にならなかったバッハの無伴奏組曲の曲想が突如として湧き出した。大僧正の許可を得て、その聖堂を夜間のみ7日間ぶっ通しで借りて練習し、録音したのが、今度CDで出たバッハ無伴奏組曲集だという。私は後日そのCDを聴いてみるとそれは成る程、紛れもないロストロポービッチの力強い、凄く構築力のしっかりした演奏でした。

大指揮者・ヤンソンス2世のこと。

ヤンソンスの息子は今世界一の實力を謳われるまでになり、アムステルダム・コンサートヘボウ、バイエルン交響楽団両方の首席指揮者を兼務して、毎年この2つのオーケストラを交互に日本につれて来るので、私は必ず聴きに行きます。

昨年（2009年）の7月は私が態々マリスに会いにアムステルダムに行きました。彼がショスタコビッチのオペラ「ムツェンスク郡のマクベス夫人」を指揮するからです。初めて観るこのオペラは衝撃的で、3幕目は夫人と恋人とが長々と演ずるベッドシーンがなんと写実的なことか。息遣いが激しさを増し、絶頂に至り、ついには燃え尽きて大きなタメ息でおわる様子をトロンボーンが見事に



世界の指揮者マリス・ヤンソンス夫妻と（2009年）

伴奏するものだから、客席もたまたま爆笑です。舞台がはねて、来客でごった返していた控え室も静かになると、マリスと奥さんのイラ、それにドイツから来た彼の友人と私の4人で運河沿いの道を夜風にあたりながら、「マクベス夫人」をテーマにお喋りしながらホテルまで歩きました。あの写実的なセックスのシーンはマリスのヴァージョンかそれともショスタコビッチが書いた通りか訊いてみたら、あれは楽譜の通りだと聞いて驚きました。（注：スターリン時代の1935年、一度このオペラは上演されたが以降禁止され、ショスタコビッチへ当局の監視が強まった）

とねりこ・コンサートを主宰して、

さて、最初に挙げたピアニスト、フランス・クリダが脳天を打ち意識を失った衝撃的事件は少な

からず私を刺激し、定年になったら自前で劇的なコンサートを立ち上げたいとの思いに火をつけました。その思いを実現するについては指揮者、西本智実嬢から種々教えて頂きました。お陰で無事これまで、アナスタシア、メジューエワ、カンディンスキーを含めた計8回のコンサートを立ち上げることが出来ました。

また、コンサートには、順不同ですが河西良治さん、高木靖雄さん、田尻真啓さん、蜷川親秀さん、北川敬さん、大北克己さん、金城弘明さん他大勢の先輩友人に、また外部からは神戸製鋼所元社長の熊本昌弘氏、元住金役員の稲田正三氏とご家族、元川鉄副社長小樽敏夫氏、三平武男氏、西山武夫氏ご夫妻、昭和シェルの市橋浩氏、横河電機の沢谷照夫氏、更に、本文冒頭に書いた、往年の名ピアニスト井口基成氏のご令嬢、渡邊康子さん、任侠役者で有名な鶴田浩二氏のご子息で科学者の小野幸生さんもチケットを買って度々ご来場くださったのは誠に光栄です。

コンサート運営で毎回出る赤字の半分を負担してくれた恩人は、私とニチメン同期入社で、その後独立して東西薬局〔株〕を設立、今は会長をされている猪越恭也さんです。同氏は、漢方の書籍を13冊出版し、その一部は本家の中国で教科書に使われているということです。この紙面をお借りして、私を支えて下さる多くの方々に御礼申し上げます。

（終わり）



イギリス徒然

柴 田 隆

“金持ちの虚しさ”を知るイギリス人



イギリス人は民族として“金持ちの虚しさ”を知っているように思う。

東南アジアに行くと、金儲けに血眼な雰囲気が伝わってくる。しかしイギリス人は、お金には淡々として人生を楽しんでいるように見える。

歴史を振り返ってみると、海賊となってスペインの船を襲ったり、植民地獲得に精を出した頃は、彼等も金儲けに懸命だったはずである。その後、世界の七つの海を支配して、植民地よりのあがり、産業革命による世界の工場としての稼ぎを一世に亘って溜め込んで、金持ちになった。そこで“金持ちの虚しさ”を味わったのではないかと思う。

我々日本人も戦後の廃墟の貧しさより出発して、“金持ちになれば幸せになる”と頑張ってきた。そして、半世紀を経て経済大国になって生活は豊かになったが、今ひとつ幸せ感がない、こんな筈ではなかった、というのが本音ではないかと思う。

“一切の不幸せは、貧しさや不足から生ずるもの

ではない。あり余る所から生ずるものだ。”とトルストイが言っているそうだ。19世紀に“金持ちの虚しさ”がロシアで説かれていたとは驚きである。

それでは、幸せとは何か、

- ・暖かく、愛にあふれた大家族をもつこと。
(ジョージ・バーンズ：米俳優)
- ・共に喜び、共に泣く友をもつこと。(宮川マチ：歌人)
- ・好きな人、惚れた人をもっていること。(青沼博三：実業家)
- ・おいしいことは幸せのひとつ。(辰巳芳子：料理研究家)

幸せは人さまざまである。しかし幸せとは、物(お金)を持つことではなく、心の満足の問題であることが分る。

この点、我々日本人はよき先達に恵まれている。西行、兼好法師、鴨長明、良寛等の世を捨て、風流に生きた人達がいる。この人達の生き方は、我々日本人の今後の生き方のひとつのヒントになると思う。

イギリスの人達が、パブで仲間と談笑するのも、ジョークが生活の一部になっているのも、ムダな議論(ミルクテイは紅茶、ミルクのどちらを先に注ぐか。)を好んでやるのも、イギリス式カクテルパーティーでは食べ物のカナッペだけでお互いの会話がご馳走というのも、物(お金)の虚しさを味わった挙句、考え付いた幸せ探求の為の英国式風流の道なのかも知れない。



ジョークと民族性

ジョークには民族性をネタにするが多い。

パブの仲間から“日本人のジョーク”を折に触れ要求された。狂歌、川柳、漫才、落語には日本人のユーモア精神が一杯ある。川柳でも紹介しようかと考えた。そこで下ネタと外国人に判らないネタを使ったもの（例、“高楊枝 腹が減ったら傘を張り”）以外の普遍性のある川柳一例、“役人の子はにぎにぎをよく覚え”一を翻訳しようと試みてみたが、可なりこなれた英語力が必要であり、又翻訳できても短すぎてジョークにならないことに気づいた。そこで日本人のジョークをリクエストされると、“目下翻訳中。”と答えて逃げることにしていた。

イギリスではスコットランド人のケチ、アイルランド人の間抜け、がジョークのネタになっている。—スコットランドの刑務所で服役囚より宿泊代と食事代の徴収を開始した。直ぐに犯罪が激減した。
—アイルランド人の探検家が南極へ探検に行くと行って出発した。
一年後、北極で死体で発見された。

これがヨーロッパになるとスコットランド人のケチは変わらないが、間抜けなのはポーランド人になってくる。

“あり得ないこと”として、ドイツ人のコメディアン、アメリカ人の哲学者、イギリス人の料理人、日本人のプレイボーイなのだろう。

“人生の最高の生活”とは一昔前は、アメリカ式住宅に住み、日本人の妻、中国人のコック、ドイツ人の家政婦、フランス人の愛人を持つことと言われていた。最近ではアメリカで給料を貰い、イギリスの住宅に住み、日本人の妻、中国人のコックを持つことになっているようだ。

因みに、“人生の最低の生活”とは、中国で給料を貰い、日本の住宅に住み、アメリカ人の妻、イギリス人のコックを持つことだそうである。

これで見ると日本人女性の評価は高く、正妻の座を確保しているのはご立派である。

日本人男性は、このような日本人女性を妻にでき幸せであるということになるが・・・・。



柴田 隆（大阪社友会・会員）

第六回ニチメン機友会の盛会に思いを寄せて

山 岸 正 雄

第六回ニチメン機友会は平成23年10月22日無事開催されました。茲にご参加戴いた皆様に感謝を申し上げますと共に、ご参加戴けなかった方々に対し以下機友会の様子をお知られ致します。

1. 開催日と会場及び参加人数

会場準備は半年以上前から恒例の八重洲富士屋ホテルを予約し、開催日を平成23年10月22日と決めていた為、当日の天候は秋晴れを祈るしかなかったが、当日は生憎低気圧の通過と重なり、朝から荒れ模様の中での開催となった。前日までに出席を表明された方の中から体調不良や急遽都合が悪くなり欠席する旨の知らせが相次ぎ、合計6名を数えていた

矢先の天候不良だけに、幹事一同、空を仰ぎ当日の欠席者がこれ以上増えない事を祈った。

その甲斐あってか、当日のキャンセルは殆ど無く、合計68名もの参加となり、今迄の記録を塗り替える程の大盛会となり、関係者の安堵がいつしか喜びに変わる良き日となった。

2. 案内状の送付状況とメールアドレスの把握

今年のニチメン機友会は、プラント本部が当番幹事を務め、水庫博夫幹事長を中心に1月より関係者が集まり計画を練り、7月に具体的な役割分担を決め、進行状況は相互にメールで連絡を取り乍ら、且つ細部の微妙な連絡は電話で意思疎通を計ったが、それでも出席者名簿の最終作成段階では人数の正確な把握に若干の蹉跌も生じ、二重に呼び掛けを行ないひんしゅくを買ったり、欠席と通知があったにも拘わらず確認する等の不手際もあり、ご迷惑をお掛けした方々には紙面をお借りしてお詫びを申し上げます次第です。

然し、常任幹事の高木亨一さんの巧みな運営と、膨大な量のメールアドレスを丹念に調査し纏めた与儀治さんの努力及び部外乍らPCを駆使して名簿作成に協力して下さった森江健児さん、及び各自の分担を責任以って果たされた関係者の大変なご尽力により、機友会OBメンバーの方々のメールアドレスが相当数追跡出来、今年度からの会員への呼び掛けは、経費節減も兼ねてメールを中心と

した案内が主体となり、その数が300名以上にものぼり、往復はがきによる案内状の郵送は僅か70葉程度に縮小出来た事は、今後の会員相互の連絡を一層容易にする大きな成果であり貴重な記録を得る結果に繋がった。

3. 長老出席者及び宴会の内容

司会・進行係は、新進気鋭の久本紘一さんをお願いし、意外と知られていないが、先ずニチメン社歌の生バンド伴奏を聴き終わってから会が始まった。例年機友会にはニチメン

OB諸氏の演奏する生バンド加わり大変な好評を博しているが、今年も恒例となった通称“与儀マンドリンクラブ”のフル演奏が常に会の雰囲気を高揚させ参加者の心を和ませた。

今回参加されたお方で特筆すべきは、わざわざ大阪より、野村喜久雄さん、辻井準一さんはじめ合計で6名が駆けつけて下さり、更に初参加の松尾憲一さんもお元気なお姿でご参加下さり、本会を盛り上げて戴き厚く御礼を申し上げます次第です。又、御三方より一言づつ、ご挨拶をお願い致しましたが、先ずは、野村さんより最初にご挨拶を戴き、プラント部の思い出として野村さんが始めて東京のプラント部、当時は未だ「電機海外建設部」と称した時代に着任された往時を偲ぶ数々のエピソードをご披露戴きました。

又、我がニチメン機友会の上条達雄会長は、御年88歳のご高齢による体調不良を押して今回御出席され、会長ご挨拶では“若い人々に接し、若さを貰い数年若返った”と意気軒昂な処をお示しになられたが、現在の体調を御配慮され今年が限度とご判断され、新会長を石沢謙一氏に譲りたい旨を申し述べられ、並み居る会員の皆様による圧倒的な拍手を以って承認され、茲に新しい機友会会長が誕生し、引き続き石沢新会長よりのご挨拶も戴いた。

更に、水庫当番幹事長のご挨拶と乾杯の音頭をお取り戴き、漸く、一同が会食・歓談に進んだが、その間、久本司会・進行係の巧みな話術により、ご挨拶の間は参加者の雑談や私語の少ない効率のよい会の進行が計られたことは注目に値する。

会食が、一段落した後、前述の辻井さんよりのご挨拶並びに松尾さんより初参加のご感想等お言葉を頂戴した後、今年度の新しい試みとして、参加者全員で歌を合唱する事で世代を越えた一体感を味わおうとして“青春時代”を予め選び、バンドの方も練習も重ね、

当日は歌詞を配り、機友会の常任理事や関係者にご協力願い、壇上より声をはりあげて戴き、参加者は老いも若きも大声で合唱し成功裏に歌う事が出来たばかりか、アンコールまで追加したりして一体感を味わう事が出来た。

4. 会員の皆様の将来に思いを込めて

さて、終りが近かずき、中締めは小生の役目であったが、皆さんのお元気なお姿を拝見している内に、斯様な想い出深い歓談の機会をいつまでも続けたいと考えるにつけ、此処に居並ぶ畏怖すべき遅い諸先輩・後輩の将来に幸あれと願いを込めて、

“ニチメン時代に培った知恵や学んだ豊富な知識と上司に厳しく鍛えられた忍耐を以って事に当れば、多発する災害や悪環境に打ち勝って、きっと明るい将来があると信じております”と思わず

口を衝いて出てしまったが、病気は兎も角、ニチメンOBの皆さんは、世間の一般人より数倍も遅い“つわもの”と信じており、いつまでも往年のかくしゃくとした勇姿を臉に焼付けたいとご長寿を願うばかりであった。

5. 関係者のご協力に感謝

最後に、受付や集金、会計、会場のレイアウトなど地道ながら無くてはならぬ部署を全うされた佐藤統次さん、及び今回初の試みであった集合写真を帰るまでに持ち帰れる仕組みを実現させた豊間根政行さん、その他既述の今年度の機友会担当の関係者全員のご努力の結集が今年の会を盛上げ、成功裏に遂行出来た要因と確信し茲に深甚なる感謝を表明致しご報告する次第です。特に、一緒に取り組んで各場面で素晴らしい才能を発揮された後輩に当る多数の関係者を認識した感動は小生の宝であり喜びでありました。

尚、来年度の「ニチメン機友会」は「電子電機部」が当番幹事となり、平成24年10月20日（土）を予定しております。本年以上に多数のご参加をお願いすると共にご盛会をお祈りしております。

2011年10月22日(土)開催 第6回機友会懇親会出席者

(順不同敬称略)

荒 木 武 雄	佐 藤 鐵 雄**	橋 爪	覚	矢 吹 敦 司
新 崎 盛 晨	佐 藤 統 次**	長谷川	洋**	山 岸 正 雄*
池 永 浩	林 光 生(バンド)	林 正 弘		山 邑 陽 一
石 川 信 行	福 西 育 郎(バンド)	林 幹 夫		与 儀 治**
石 澤 謙 一**	三分一 克 美	久 本 紘 一*		吉 川 秀 夫
泉 伸 夫	柴 田 実	廣 本 昌 也		吉 水 稔**
稲 治 寿	高 木 亨 一**	福 富 直 明		米 田 圭 祐
今 村 隆 夫	高 瀬 善 男	古 家 章		立 古 健 策
大 羽 陽一郎	田 中 伸 介	保 科 孝		若 原 哲 夫
岡 村 宏	田 中 長 典	本 田 務		石山(篠塚)幸子
河 西 良 治	辻 井 準 一	前 田 進*		上 條 達 雄
川 西 勲	豊間根 政 行**	牧 洋 生		榊 山 俊 次
川 西 啓 三	永 井 存	松 尾 憲 一		小 堀 裕 子
木 皿 重 正	中 原 正 紀	水 庫 博 夫*		増 川 恵 子
木 寺 厚 二	中 村 吉 夫	溝 江 博 三		吉 田 純 子
倉 又 則 夫**	南 部 捷 郎	三 原 均		
小 橋 雅 寛	西 楨 憲 生	村 上 匡 一		**常任幹事
五月女 穰	野 村 喜久雄	森 江 健 児		* 2011年当番幹事



石澤謙一新会長

第6回機友会懇親会風景

2011年10月22日（土）

八重洲富士屋ホテルにて



上條達雄前会長へ花束贈呈

書評

『老いる覚悟』 森村誠一 著（ベスト新書）

澁 谷 義

著者は、1933年生まれ。江戸川乱歩賞や吉川英治文学賞を受賞している著名な作家である。

「老後は20年余りの人生ではない！ 老いるのも楽じゃない」と帯封に記されている。超高齢化社会を迎えている。老後をどう生きるか。真剣に覚悟をもって生きることを著者は訴えている。

最新の数字では男性79.5歳、女性86.5歳になった日本人の平均寿命である。以下、本書の要点と感想を記してみたい。

今回の大震災に遭遇して、「老いる覚悟」の必要性を改めて痛感したという。覚悟には三つの種類がある。平穩無事で何も不満がない時の覚悟。次に、異常事態が起きて、変化がおきた場合の覚悟。最後は、近い将来起きるであろう出来事に対する覚悟。臨終に向う覚悟である。

誰でも、便利性の奴隷、つまり「便奴」になっていることを、著者は警告している。バリアフリーは、本当に不自由な人のためにある。尊敬される高齢者になることを著者は勧めている。

著者は。俳句を親しみ、若い頃からのカメラの趣味をセットし、ブログにあげたら俄然アクセスが増えたという。写真俳句を楽しんでいる。凝縮の俳句や川柳は頭の体操に効果抜群と思い、時折私も詠んでいる。老いても絶対枯れないという執念を持つことが大切である。配偶者に先立たれて

もひとりで生き抜く覚悟をする。これは男性に当てはまるか？ 私の周囲の未亡人は総じて元気である。

著者は奥の細道を、3年がかりで歩いた。松尾芭蕉の140日余、2400キロの行程の杖跡を追った。「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」の芭蕉に対し「行き着きてなおも途上や鰯雲」と著者は詠んだ。

健康を守るための四つの生活習慣を提唱している。朝夕二度の食事の合間に、十時と三時のお茶とおやつをとる。満腹でなくこまめに補給する。

胃が軽くなり、ストレスが解ける。夕食後に入浴する。寝る前に一杯の牛乳を飲む。水分補給を欠かさない。

「面白くない人生なんてない。そんなものはあり得ない。一見退屈そうでも、内にはドラマがあり、コメディがあり、そして悲劇がある」と作家マーク・トウエインの言葉を最後に紹介している。



書評

『悪名の棺、笹川良一伝』 工藤 美代子 著 [幻冬舎]

澁 谷 義

409頁あり、読み応えあった。「贅沢を厭い、徹底した実利思考と天賦の才で財を成すも、福祉事業に邁進・・・腹心の裏切りは素知らぬ顔でやり過ぎた。仏壇には、関係した女の名が記された短冊を70以上並べ、終世、色恋に執心した日本の首領（ドン）。情に厚く、利に通じた昭和の怪物の正体・・・」

笹川に貼られた悪名のレッテルは、ファシスト、日本の黒幕、ギャンブルの胴元、日本のドン、戦後のフィクサー、競艇屋の怪物などと枚挙にいとまがない。

笹川は、大阪府三島郡豊川村の出身で、作家の川端康成が同級生であった。比較的裕福な造り酒屋の長男で、明治32年生まれ。餓鬼大将で、秀才の川端とは対照的であった。

父親の死後、かなりの財産を引き継いだ良一は、米相場の先物取引と株で大金を手に入れた。若干26歳で儲けた金は、百万円（現在の約30億円）。最初の菊重との結婚は、東奔西走のため、8年で破綻した。大正の金融恐慌では、倒産した銀行も救済している。

32歳の若さで、憂国の情やみがたく国粋大衆党（後に国粋同盟に変更）を設立し、総裁となった。後に児玉誉士夫も東亜部門の責任者として登場。大正の大地震から昭和初期にかけて左翼運動・無産運動が勃興した。これに対抗し、多くの国粋主義の愛国団体が結成された。児玉誉士夫は、福島県の出身、父親と一緒に朝鮮に渡った。養子に出されたが、10歳の時一人で二本松に戻った。その後、東京再び朝鮮に渡り働いた苦勞人であった。

この時代の日本の多くの青年は、左翼か右翼のいずれかへ追い込まれた。児玉は、いくつもの右翼団体を転々とした。笹川と児玉は、大阪北浜で出会ったが、同じ右翼でも正反対の人生を過ごしてきた。

笹川31歳の時、東京銀座のキャバレー売れっ子ホステスの喜代子と結婚した。親交のあった山本五十六元帥には、浜松を境に関西と関東に女性を住み分けさせると豪語した。笹川と喜代子の長男が勝正、三男が陽平である。川島芳子・愛新覚羅（清王朝の王女、男装の麗人）とも愛人の関係であった。東京の琵琶と詩吟の新星・宮川静江とも結婚した。

大阪の茶道裏千家の師範格の美人・原一江との結婚、入籍した時は、笹川が45歳になっていた。一江を本妻とした。

笹川と児玉は、A級戦犯として巣鴨刑務所に服役した。「極めつきの悪役、危険な人物」として二人は起訴された。戦前に入獄経験のある笹川は、巣鴨刑務所で、ひと暴れを期待していた。待遇改善や裁判技術を指南する意味だった。A級戦犯のレッテル獲得を欲しかった笹川であった。昭和23年に二人とも釈放された。児玉は後にロッキード事件で起訴されたが、判決前に他界した。

巣鴨拘置所を出て2年過ぎ、笹川は昭和25年に船舶振興会設立を企画し、翌年議員立法を提出させ、「モーターボート競争法案」が成立した。初代会長は、足立だった。昭和27年に笹川は公職追放解除になり、昭和30年に第二代会長に就任した。

笹川は勲一等旭日大綬章勲一等瑞宝章を受けている。96歳の長寿を全うし人生を閉じた。人の価値は「棺を蓋（おお）いて事定まる」といわれる。生きている間は毀誉褒貶あって人物評価が定まらない。

『国を憂うこと、即ち「悪」を背負うことなり』ともいう。怪物・笹川良一とは、一体何者だったか？ こんな人物は二度と現れない？！

「てふてふ」の韃靼雄飛

浜 地 道 雄



2005年、愛知万博。そのサウジアラビア館の設営準備で25年ぶりに、懐かしの地を訪ねた。見事に変貌した首都リヤドだが、旧市街や住んでいた地区は

変わりなく、まさに夢のようだった。

打ち合わせのあと、皆で日本料理店で会食の時、隣にディスターシャ（アラブ民族服）姿の数人の若者がいた。何と一人は日本人。リヤド大学に留学中、イスラム教の勉強をしてる由。そして、その仲間はTatarstan (The Republic of) タタルスタン共和国から来てるとのこと。韃靼人！！

韃靼（だつたん）とは、つまり、イスラム系中央アジアで、人種、宗教、部族が歴史的にまた地政的に余りにも入り組んでおり、ひと言で説明するには「蒙古系の一部族タタール（塔塔兒）の呼称。のち、蒙古民族全体の呼称」と広辞苑を借りねばならない。

ボロディンの「韃靼人の踊り」はそれこそエキゾチックだし、蕎麦にも茶にも韃靼がある。身近のタルタル・ステーキはタタールに由来している。ハンバーグも元々はタルタル・ステーキを焼き、ソースで味付けしたものがドイツのハンブルグでの労働者の食事だったことに所以があると言われる。

もう何世紀にもわたり、ユーラシア大陸内部の中央アジア、北アジアで活躍したモンゴル系、テュルク系、ツングース系とが混然とした魅惑の世界だ。

そして、そもそも「——スタン」とは、ペルシャ文化の影響を受けた地方の民族の名称の語尾に接続して、地名を形成する。

Afghanistan アフガニスタンに、クルディスタン Kurdistan。さらにはアラビアのことはArabestan アラベスタン。中国のことはChinastan チナスタン。インドはHindustan ヒンドウスタン。ポーランドやハンガリーですら、それぞれLehastan レハスタン、Macaristan マジャリスタンと呼ばれる。イラン（ペルシャ）自身はParsqastan パルスカスタンだ。



さらに興味深いのは「パキスタン」(1947年独立)。構成する5大地区の頭文字をとった合成語で、パンジャブ (Panj Ab = 5つの水=川の意) のP、アフガン Afghan のA、カシミール Kashmir のK、シンド Sindh のS、バロチスタン Balochistan のSTAN で PAKISTAN となる。ペルシャ語では「清浄な国」を意味する。

同じ中東でも、ペルシャとアラブは人種的には違うのだから、ミックスの例もある。駐日サウジアラビア大使は Turkistani 氏。トルキスタンとは Turki、つまりトルコがオリジンで、何代か前にサウジアラビアの聖都マッカ、マディナに巡礼にきて、そのままジェッダに永住したイスラム教徒の末裔である。まさに親しみのあるアジア顔で、成城大学と早稲田大学で学んだという親日派。

こうして中央アジアを考えていると、「てふてふ」が一匹韃靼海峡を渡って行った」(安西冬衛、1927) という一行詩が心に浮かぶ。A butterfly crossed over the strait と翻訳しても様(さま)にならないし、So what? (だからどうした) となるかもしれない。

しかし、国際ビジネスマンたるもの、思いを「未知の世界への挑戦」と解してはどうだろう。小さく可憐な生き物「てふてふ」には、その先にまだまだ「雄飛」すべき果てしないアジアの大地が広がる——。そこに秘められているのはグローバル・マインドという原点だ。

(社)日本在外企業協会「グローバル経営」より転載・加筆

俳句の会「いろは句会」

宇 治 田 薫

I. 句会のその後：

千年に一度と言われる天変地異に見舞われた卯年が暮れようとしている。平成元年1月に発足した当句会は、丸23年を迎える。太田主宰を補佐する為、句会の資料作成や前回優勝者が進行係を務める等会員による自主運営方式を採用以来2年が経過し、軌道に乗って前進している。

加えて、プロの結社や他の関係グループの句会に任意参加する等して、各会員は夫々研鑽に勤しんでいる。また、句会での発表句について主宰を初め、会員相互の厳しい合評に緊張することもあるが、和気藹藹の内に一同句会をエンジョイしている。

例により、前号以降の作品の中から各会員2句宛下記にご披露する事と致します。

I. 会員の発表句（アイウエオ順）：

春深し変りはじめし鳥の声	(あ き ら)
箱根路や黄金に染まる芒の穂	//
野の色の動き出したる若葉風	(宇治田 薫)
鯖鮎や炙りて香る川の風	//
盆の月遍く照らす地震の浜	(太田 琢也)
むら薄瓦礫撤去の儘ならず	//
レシピーのあれこれ思ひ路をむき	(久保田悦子)
雨やみて幹黒々に柿若葉	//
堰上る鮎見る吾も力みをり	(三枝 一希)
撫子や無口な君を送る道	//
湯の街の朝空に翔け岩燕	(笹原 弘)
湿原の朝靄に濡れ濃竜胆	//
蕎麦の花浅間は雲に隠れけり	(佐藤 秀隆)
兄弟の近くて遠し盆の月	//
一鉢の句の味なる庭の露	(下川 泰子)
楚々としてきりりとみゆるあやめかな	//
りんどうの思い染みるや濃紫	(須藤 忠昭)
炊き上がるふるさとの味今年米	//
指先に文字確かめ墓洗ふ	(塚本 幸雄)
上りゆく棚田の果てや雲の峰	//
葭簀張り幻のごと人が過ぐ	(福島 有恒)
品書に虫の音添へて山の宿	//
卯浪寄す岬とんびは大まはり	(藤野 徳子)
蟬時雨梢の隙を埋めつくす	//
葉から葉へ雨水引き受く野路かな	(若月 義和)
弓を射るポニーテールや今朝の秋	//

以 上

華の1986年入社、同期会

小 堀 裕 子

ニチメン入社より早や四半世紀が経ちました。本年7月14日、同期の仲間男女32名が、赤坂の双日本社から程近い転石亭（HANARE）一堂に会しました。

同期生という一生変わることの無い紐帯で結ばれた仲間達の懐かしい顔、顔が集まってきました。

今まで夫々の歩んできた路は様々ですが、顔を合わせれば、新入社員時代の夢と希望に満ちた懐かしい日々を思い起こし、四方山話に花が咲きました。

私、小堀は、ご縁があって、ニチメン社友会の催事のお手伝いさせて頂いておりますが当日は偶然にも、昼から東京ニチメンOB会もあり、大先輩方の皆様にも御会いできたこと大変幸運に感じております。

個人的には一日に二つのニチメン関係の集まりに参加するという思い出深い日となりました。

やがて私たちもOB・OGとなって社友会のお仲間入りをいたします。

その節は、よろしくお願いいたします。

先輩各位のご健勝をお祈りして、



参加者（順不同）

女性；大熊 恭子・永江・片海 美詠子（旧姓武内）・小堀 裕子・伊藤 智子（旧姓大島）・石原 京子（旧姓小林）・落合 れみ（旧姓中田）・斉藤 純子（旧姓吉田）・斉藤 恵子（旧姓中江）・三浦 智子（旧姓渡辺）〔＊2列目、右から4人目Vサインが筆者〕

男性；永田 彰・門田 浩一郎・藤久保・佐々木・榊田 宣弘・寺内 達哉・小菅 良宏・外林・佐竹 紀男・乾 義和・岡村 義明・角田 和雄・佐野 栄右・熊谷 正二・萩野 恭司・鈴木 良典・栗原 靖幸・柳下 幹生・伊藤 佳彦

ニチメン湘南会GOURMET会

長谷川 洋

今年は3・11東日本大震災のため春の開催を中止してたので、一年ぶりに11月1日、横浜・崎陽軒にて開催。

この日は、7月に急逝された“ニチメンのシアヌーク殿下”こと「久澤克巳さん」を偲ぶ会をも兼ねた。“LIVE LONG”を会のモットーにして、GOURMET会を“倶留命会”などともじって十余年に亘り、回を重ねてきたが、安藤幸男さん、岩田昭二さん、都築基夫さんとは、幽明界を異にしてしまった。

これからは大阪から遥々ご参加の野村喜久雄さんのご長寿にあやかり、われらも LIVE LONGを願いたいもの。

故久澤克巳さんの急逝は御本人にとっても誠に慙愧に耐えないことでしょう。2011・7・20付“日経新聞”首都圏経済欄に、トップ記事で、日本とヴェトナムの経済交流を促進する為、新会社を設立し、社長に就任したと掲載され、本人も張り切って、これからだの時に運命が暗転してしまった。

後日開催された“偲ぶ会”では、川崎市長はじめ各界の要人がご参加し、ベトナム人副社長が泣きじゃくって挨拶にならなかったのが印象的だった。

久澤さんのお人柄と温顔は何時までも忘れない。ご冥福を祈りつつ、攬筆。



《敬称略》

前列 左より；立古健策、藤野泰三、野村喜久雄、北村俊夫、

後列 左より；長谷川洋、牧 洋生、朝倉重道、笠井公雄、丸山泰三、北川 敬、本田 務

弔 辞

== 故土橋久男さんのご葬儀に際して ==

丸 山 修 作

土橋さん、過去五十年の長きに亘り先輩、友人、そして人生の最高の師匠としてお付き合い頂いた、土橋さんに最後のお別れの言葉を述べさせていただきます。

土橋さんと初めてお会いしたのは、昭和三十五年十一月土橋さんが米国ニチメン・シカゴ支店創設の為ニューヨークより赴任されており、私が日本より支店次長として馳せ参じた時であります。

爾後六年、土橋さんが帰国する迄、次長としてお仕えしました。その間、土橋さんの学識の豊富さ、剣道の達人、ゴルフはプロ級、そして家族愛に満ち溢れた貴方は、私などの到底及ばざる人物であることを識りました。

当時、日本の演劇『羅生門』はアメリカでも話題となりシカゴ大学の演劇部が剣の立ち回りの指導をシカゴの日本領事館に依頼して来ました、日本領事館は直ちに土橋さんにその指導を懇請し貴方はそれを引き受け、シカゴ大学の羅生門は成功を収めました。

ゴルフの強さは、又抜群で特にアイアンの切れ味は鋭く、貴方は昭和二十年四月の沖縄特攻出撃の時に受けた敵戦闘機の機銃弾の破片が未だ俺の肩に残っているからだと豪語していました。

お美しい奥様と、三人の可愛いお嬢様方に対する日ごろの愛情は洵に細やかで『俺は毎朝家族の食事の後片付けに何十枚の皿を洗って出勤するんだ』と云っておられました。

朝から、何十枚もの皿を洗うとはどんな朝食をしているのかなあと、社員皆首を傾げていました。

私との関係はニチメンの先輩後輩と云うより、戦時中日本海軍に共に籍を置いていたという事です。貴方は一橋大学出身の兵科予備学生四期の海軍少尉として沖縄特攻に出撃したに大和の護衛艦「冬月」に乗艦し、対空戦闘機銃指導にあたっており、五年後輩の私は江田島の海軍兵学校生徒として訓練に励んでおりました。大和爆沈後大和の漂流者救助の為貴方はみずから救助作戦に志願し、小さな内火艇を駆って荒波に乗り出し参謀長森下

少将を無事救助された事は有名な話です。

その時他に何人かの兵学校出身の若手がいたのに前任将校の「土橋は剣道の達人だから」との一言で予備学生である貴方がその任を任されたと聞いております。

兵学校出身の本チャンよりも予備学生出身の貴方のほうが海軍精神を心の髓より体得している事を上官は知っていたのでしょうか。

貴方は母校の諏訪中学を心から誇りにしてました。周りに海のない信州の諏訪中学校から多数の海軍の英方が輩出しています。

大和の有賀艦長ほか、諏訪中学校出身の多くの将星について熱っぽく話される土橋さんの姿は印象的でした。

こよなくニチメン、日本海軍、そして諏訪とご家族を愛された偉大な先輩土橋さんにお別れせねばならぬは痛恨の極みです。

どうぞ安らかにお休みください。そして最愛の奥様と天国で仲睦まじく過ごされる事祈っております。



土橋久男さんのご逝去を悼む

三分一 克 美



2011年7月25日土橋さんが亡くなりました。

土橋さん編著の海外職業訓練ハンドブックの略歴には次のように掲載されています。

1947年ニチメン入社、1952年から56年まで対米輸出の為米国ニチメン勤務、絹、生糸、雑貨、繊維製品、非鉄、工作機械、エレクトロニクスを取り扱いデストリビューション、OEM商いに従事、帰国後営業、非営業本部を経て、常務取締役、常勤監査役、1986年より“（財）日本パキスタン協会専務理事”。

戦後のわが国は貿易立国目指して、米国の全面的援助の下に発展しましたが、とくに、対米貿易は急速に増加したので、米国ニチメンが1952年に設立されました。

土橋さんは第一陣として、ニューヨークでご活躍、1960年シカゴ支店開設に伴い支店長として赴任されました。

シカゴは五大湖の一つのミシガン湖に面した、当時全米第2都市で、鉄道、空路、水路などの交通の要塞で、地の利、背景、商業、農業、工業の中西部の中心として目覚ましい

発展をしていました。

しかし乍ら、水路のセントローレンス川は、デトロイト、クリーブランド、トロント、

モントリオールを通じて大西洋に流れ込んでますが、浅瀬があるため大型船航行不能の所、アメリカ、カナダ共同で新運河を建設し、1959年にスペリオル湖まで外国と直結する事になりました。日本からも、パナマ運河経由して直行船が来る事になり、この巨大市場目指して日本から各社が進出する事になりました。

私は1961年、管理部門担当としてシカゴ支店に赴任しました。店は南北の始点0番地で、東は公園、地下駐車場、の先はミシガン湖が望め、ダウンタウンの中心部やループと云う環状線の駅の近くと云う、一等地。誰でも判り易い、現地人でも是非働きたいと思う所に事務所を借りた土橋さんの慧眼は素晴らしいものでした。その効果で千客万来、何時も店は顧客で賑わいました。

しかし、元来輸入品に縁のない内陸の保守的な都市、営業の方々は売り込みに大変苦労されたと思います。

得意の繊維分野が振るわないので、土橋さんが先頭に立ちP & G等大企業に景品雑貨の売り込み、相手先ブランドの電気製品納入、ベトナム特需の工作機械販売、線材、アルミ板、ステンレス板、ベアリング、陶器等の様々な新規分野に得意先を開拓していきました。

新設の店でも総勢30人前後の大所帯、管理部門は経理、財務、総務すべての面で組織作りからスタート。土橋さんは仕事を任せた以上些事に拘らず全幅の信頼を置く上司でしたので、存分に腕が揮えました。然し乍ら現地人の労務管理やら資金繰りなど、続発する困難な問題に処しきれなくなると何時でも相談に応じる、頼もしい指揮官でした。

今でも鮮明に当時の数々の事が思い出されます。

着任早々、先ず運転免許を取れの厳しい命令が出ました。

得意先集金と空港出迎えに必須の条件でした。

しかし、冬の凍りついた道と風の街のシカゴの強風には慣れるまで散々てこずりました。

一年後、家族呼び寄せの許可が出たときに、米国ニチメンの社長のメモに“仕事は合格だが愛想の勉強しろ”と書いてあると言われたのに対し、こんなに資金繰りに苦しんでのにニコニコ出来ないと口答えしたら、便所の鏡の前で手を洗う時、ニコリと笑顔の練習をしろと言われました。

今でも、便所に行くと土橋さんの顔が浮かび出ます。

1966年ニチメンが無配に陥った時、銀行が与信枠を突然締めて、資金繰りが苦しくなりました。それを営業に伝えたら、銀行交渉が下手だからと、営業全員から攻められました。土橋さんは全面的に庇ってくれました。

ウイスキー、カクテル、日本酒、全てに造詣深い酒豪でした。しかし、ランチのデザートにエクレアを取るほどの甘党の面もあり、後年痛風に悩まされてました。

土橋さんは1966年に帰国しましたが、営々と築かれた商権がその後見事に開花し、シカゴ支店は長く会社の業績に大きく寄与するようになりました。

その後も公私にいろいろとご指導いただきましたが、今も、改めて考えますと、土橋さんは“もっとも重要な問題点を見だし、解決のための戦略と戦術を構築し実行していく用兵の妙を得た指揮官”だったと、つくづく思います。

思い出は限りありませんが、心からご冥福を祈りつつ筆を置きます。

合掌

== MEMOIR = 土橋さんを偲ぶメッセージ = CONDOLENCE ==

当方、大阪から、東京に異動時、アメリカ向け、ヤンマーの噴射部品の担当でしたので、アメリカ通（特にシカゴ派）の土橋部長には、特訓の毎日、一から教えて頂きました。

その温厚さといい、紳士を絵で描いた様な性格、語学堪能、洋酒の飲み方、剣道、ゴルフの達人と、あらゆる面で、尊敬の出来る、上司だったと思います。

数年前のヤンマー部隊のOB会でも、元気なお姿でしたが、心からご冥福をお祈り致します。

広本 昌也（元原動機部、NY, CG）

土橋さん 私は本当にお世話になりました。

入社3～4年目で東京へ出て来て、すぐ一般機械部エンジン農機課で、他の皆さんはヤンマー一辺倒でしたが、私は、古野電気(株)と豪州copriceの佐竹製作所(株)、そして プラントから 回って来た案件で「大平君 豪州やっているのなら これやる？」から始まったパース田所さん経由の西豪州電力局向け 2000－6000KWの発電機（新潟エンジンに東芝）を必死になってフォローしていたのを土橋さんに助けて頂きました。

結果的に2000Kwから6000KWまで数台を成約出来たのは本当に嬉しかったです。豪州からの客はほとんど土橋さんに助けてもらいました。

拙い英文を見てもらいに平気で部長席へ行っていた私は、まったくの物おじ知らずだったと大分経ってから気がつきました。

部長席の後ろには部厚い大英和、和英辞典に英英辞典が置いてあって、私に教えるのに時にはその辞書を開いて「大平君、やはり、この言い方はおかしいよ」とか言って下さった。

日パ協会専務理事になられてからも何度かお会いして、「大平君 あのGEMCO豪州の人たちは楽しかったね」と言って下さって、多分土橋さんにとっても私の案件は良い思い出になっているのだろうなあ と思いました。

例のNMヤンマー担当者OB／OG会も非常に喜んで戴いて暖かい言葉もかけていただいていたよかったです。

心からご冥福を祈っています。

大平 栗雄（元原動機部、DC, TA）

久澤克己社友を悼む

山 邑 陽 一



ベトナムの友人たちと
右から2人目：故久澤さん、左から2人目：筆者

悠久のメコンの流れから一字を取り姓の頭字とし、二字目は三水偏に四つの幸せ。名は一転、天命から人事に帰って己に克つ。名実ともにすばらしい人・久澤克己さんが、2011年7月18日になくなられた。その人間好き・仕事好きの暖かいご性格を私たちの心に残して。

1931年3月に南海の輝く陽光のもと、鹿児島県の徳之島に生を享け、生涯をほぼフランス語圏、とくにインドシナとの交流に捧げた。最近では2011年4月25日、ベトナムからの留学経験者に技術を伝え同国との交流を促進するため、コプロナ株式会社を設立して代表取締役社長に就任、6月1日に事務所を開設された。そのあと、秋に予定したホーチミン支店開設に向け余念なく準備中に、気にかけていた動脈瘤手術を受けるために7月4日入院された。順調に回復されて13日に退院し、その足で3ヶ月定期を購入されるほどであったところ、15日に体調が急変し、18日に帰らぬ人となられた。

8月6日にコプロナ主宰で川崎のKSPホテルで「偲ぶ会」が行われ、川崎市市長・多くのニチメン社友を含むたくさんの方々が参列したが、そこで読まれた司会者による朗読の弔文を抜粋し、私自身の思い出を加えて、下記したい。

久澤さんが10歳を迎えた年に太平洋戦争の時代となり、戦中・戦後の厳しい時代に、少年の日々を過ごされた。故郷を離れ、大阪に出てきてからは、母親と二人きり。生活は苦しく、中学時代から、アルバイトをしながら、お母様と支えあって暮らされた。

昭和23年4月、大阪府立池田高等学校の2期生として入学、この年より学制改革で男女共学となった新しい活気の中で、高校時代を過ごされた。小さい頃から、人懐っこい性格で、周りの人や学友達への思いやりは素晴らしく、学生達の自治会発足に当たっての自治会長選挙では75%の票を獲得、みな信頼を集め、自治会長として活躍された。また、文武両道のスポーツマンとしても才能を発揮、昭和25年1月の全国高校サッカー大会に選手として出場、宇都宮高校と決勝戦を戦い優勝し、全国制覇を果たしたことは、高校時代の一番の思い出となった。のちに有名な蔦監督率いる徳島県立池田高校が高校野球で優勝したとき、故人が母校あてに祝電を打たれたことは、久澤ファンの間での有名な語り草で、ご本人はただ間違えただけといわれるが、実は府立・県立両池田高校への激励を同時にされたのであろう。

高校卒業後は、大阪外国語大学フランス語学科に進学、英語・フランス語を修得されて、1954年、大学を卒業後は、株式会社大南公司の大阪本社に入社された。入社翌年の1955年には、語学力が評価されて、ベトナム・サイゴン（現：ホーチミン）支店に勤務することとなった。初めて、ベトナムの地に降り立ったのは、故人24歳の時で、翌1956年からは、カンボジア・プノンペン出張所に勤務された。通常の貿易業務に加えて、国連メコン河開発調査 支援業務を担当し、20代の後半を過ごされた。

1961年、時代の流れの中に大南公司が解散となった。困惑の中にも現地の会社の後始末をし、大阪本社の整理にも丁寧に取り組んでいる故人の姿に感銘を受けた日綿実業から就職の打診を受け、

同大阪本社に転入社されたのは、すぐ翌年の1962年、31歳の時であった。

日綿実業の東京本社機械部に約1年間勤務された後、翌年1963年には、プノンペン事務所勤務となった。再びのプノンペンでは、引き続き、メコン河開発調査に係わることとなった。1970年 Nichimen France SA に出向され、パリに赴かれたのは、39歳の年。翌40歳を迎えた1971年には、アルジェリア事務所に出張勤務とられた。

その翌年、1972年、アルジェリアに、Nichimen Komatsu Tracteurs et Vehicules社を設営された。当時、フランスの植民地であったアルジェリアの建設機材は、フランス製だったが、故人は、このフランス製の機材を全てKomatsu製に替える偉業を成し遂げた。フランス製機材の修理を積極的に請け負い、その仕上がりで仕事ぶりで信用を深め、信頼を勝ち取り、ついには、その素晴らしい営業手腕で、全てをKomatsu製に置き換えるという大成功を納めた。この業績は、まさに、故人の仕事に対する姿勢と信念そのものであった。目の前の利益にとらわれず、長期的な視点で、しかも、双方の利益になることを常に考慮する、この信念を生涯貫いておられた。

1974年、ニチメン東京本社建設機械部に勤務、1981年50歳の時にふたたびアルジェリア支店に赴任、2年後の1983年に、ニチメン東京本社プラント本部の勤務となり、1987年、56歳の年には、パリ商工会議所「商業・経済仏語免許」を取得、優秀賞が授与された。そして、1989年に、ニチメンを58歳で定年退職された。私が最初の東京勤務となったのは1980－1988年で、はじめの3年が機械企画総括部・あとが法務部であったが、この間さまざまな局面で、管理部門として、お仕事のお手伝いをさせていただいた。

ニチメン退職後は、1991年から96年を、中小企業事業団調査国際部の常設海外投資アドバイザーとして活躍され、1995年・64歳の年には、総合法令出版社・海外ビジネスシリーズ『ベトナム』を上梓され、自分を育ててくれたベトナムに恩返しをしたいとの熱い思いの中、とくに、ベトナム進出を検討している企業や起業家のために尽力されておられた。私の二度目の東京勤務は1991－99

年であり、国際事業展開支援がそのおもな仕事であったので、中小企業事業団を訪れて故人からご指導を受けることも多かった。

65歳を迎えた1996年から、2009年78歳までの13年間は、社団法人ベトナム協会の理事を勤められ、その間の2000年からは、社団法人日本カンボジア協会の理事も歴任、2005年からは、NPOアジア起業家村 推進機構（IDEA）の活動会員となり、2006年からは、Global CyberSoft（Japan）の日本代表・常任アドバイザーに就任、同社の創立者であるベトナム人の有望な起業家の未来を楽しみに、陰に日向にサポートしておられた。2008年からは、川崎市中小企業サポートセンター派遣専門家として尽力された。

私が2000年から6年間、大分の大学に教授として勤務した間も、故人との交わりは続いた。というよりも、もっと深めていただいた。大学に赴任早々、故人から研究室に祝文のファックスをいただき、それを研究机の前の窓に貼って、毎日眺めながら元気を授かった。専攻・担当科目が国際経済学・国際ビジネスだったので、故人の要請とガイドのもとで、何度も一緒にベトナムに出張し、ニチメン在職中は訪れなかったベトナムの経済・社会・文化・企業活動について研究して、学内誌・ベトナム協会誌に発表させていただいた。またコプロナ社の方々を含め、ベトナム・ビジネスに関係する多くのご友人を紹介していただいた。

コプロナ社を設立され、さあこれからが活動の本番だというときに、人生を閉じなければならなかったことは、故人にとってさぞ無念なことであろう。息を引き取られるまでの最後の一時、意識がない故人のそっと閉じられた目からは、幾筋もの涙が流れていたという。ご家族が、拭いても、拭いても、流れていたという。故人のご意思を継いで、私もこれからの同社の活動を支援させていただきたいと思う。

（おわり）

【編集後記】

又めぐり来た師走。 街では3・11直後の暗さは何処へか、
イルミネーションやXmasツリーの飾りが出揃って人々が行き交っている。人々の幸福度は如何ばかりだろうと思う。

10月22日、ニチメン機友会（機械OB会）で、宴半ばにして全員で、森田公一とトップギャランの「青春時代」を唄った。

遠く過ぎ去った青春を想い、“♪卒業前の半年で・・・”ではじまり
“♪青春時代の真ん中は、道に迷っているばかり～”と絶唱した。

たしかに若さ故に道に迷ったこともあるのが青春だったかも。
出席者、それぞれの思いを込めて歌ったことでしょう。

しかし、今は、老いたるがゆえに道に迷うこと屢である。
城山三郎著「どうせ、あちらへは手ぶらで行く」（新潮文庫）を読んで安心した。かの気骨の作家、城山先生にして、70歳を過ぎた頃よりは、“道に迷う”ばかりか、忘れ物、約束のダブル・ブッキング、原稿をダブって書いたり、数々の過誤を述べている。

歌が出て来たのでついでに、もう一つ、石原裕次郎の唄う例の歌；

♪長かろうと 短かろうと・・・・・・右だろうと 左だろうと・・・・・・わが人生に悔いはなし♪
をリフレインで唄い上げ、最後の章節で、
♪桜の花の 下で見る 夢にも似てる人生さ・・・・・・生きているかぎりは 青春だ
夢だろうと 現だろうと
わが人生に悔いはない♪

従って、マハトマ・ガンジーの言「明日死ぬが如く生き、永遠に生きるが如く学べ」
または石川達三の言「生きているこの一日を楽しもう」を紹介して、編集後記に代えます。

今 病める人も、健やかな人も、それぞれのお正月を無事お迎え下さい。

（ 長谷川 洋 ）

ニチメン東京社友会

〒107－8655 東京都港区赤坂2－14－27
双日(株)内 東館17F

発行人	；倉又 則夫	代表世話人
編集責任者	；長谷川 洋	世話人
アドバイザー・スタッフ	；高木 亨一	世話人
	倉持 次雄	世話人
印刷所	；(有) 関 内	印刷